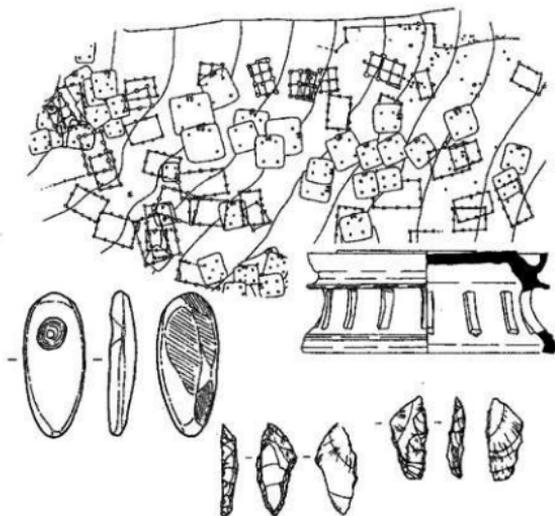


平成13年度

東九州自動車道（都農～西都間）関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ



2002

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団九州支社の依頼により、平成11年度から東九州自動車道の都農～西都間建設工事予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

今年度は、20の遺跡について本調査を行い、多くの重要な成果を得ることができました。

中でも、旧石器時代の調査は、当地域の歴史の第一頁を解き明かすという意義を有するのみでなく、日本列島に登場した人類の原像を知るための貴重な資料を提供するものと考えられます。

また、確認調査によって今後の調査の見通しを得ることができましたが、そうした資料収集の積み重ねが、本調査の成果につながっていくものと確信しています。

これらの成果についてまとめた本書が、埋蔵文化財への理解を深めるための一助となり、学校教育や生涯学習の場で広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査に際しましてご協力いただきました関係各機関や地元の方々に、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

- 1 本書は、平成13年度に宮崎県教育委員会が、日本道路公団九州支社の依頼を受けて実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
- 2 本書に使用した遺跡位置図（第1図）は、国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。各遺跡の周辺地形図は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所提供の地形図を基にした。
- 3 本書中の方位は、国土座標第Ⅱ系の座標に基づく。
- 4 本書の執筆は、第Ⅰ章と第Ⅱ章は調査第一課主査 吉本正典が行い、第Ⅲ章については各遺跡の調査担当者が行った。編集は吉本が主として行い、成相景子、辻 弥生がこれを補助した。
- 5 第Ⅰ章第4節の層序の概略記述に関しては、松田清孝の観察所見を基にしている。

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査の経緯と調査組織	1
第2節 調査地の位置	4
第3節 調査方法	4
第4節 基本層序	5
第Ⅱ章 確認調査の結果	6
第Ⅲ章 本調査の成果	7
第1節 川南町内の遺跡	7
第2節 高鍋町内の遺跡	10
第3節 新富町内の遺跡	44

第I章 序 説

第1節 調査の経緯と調査組織

宮崎県教育委員会では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け、東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施している。今年度は平成13年4月1日付けで同公団九州支社と宮崎県文化課の間で契約が締結され、同日より平成14年3月29日までの期間、宮崎県埋蔵文化財センターが調査を実施することとなった。

4月には、下耳切第3遺跡、牧内第1遺跡など、前年度から継続中の6遺跡の本調査が始まり、5月に野首第2遺跡など3遺跡、8月に牧内第2遺跡、9月に小並第1遺跡、10月に老瀬坂上遺跡と唐木戸第3遺跡、11月に東畦原第1遺跡など3遺跡の調査が開始された。それらは全て高鍋町および新富町内の遺跡であるが、12月より川南町内の2遺跡の本調査も始まっている。

また1月に野首第1遺跡、3月に向原第1遺跡の本調査に取りかかる予定であるため、今年度は20遺跡で本調査が実施されることとなる。

さらに5月より調査可能箇所の確認調査を実施している。

調査組織は以下の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 岩切 正憲

教育次長 福永 孝義

教育次長 川口 靖文

文化課長 黒岩 正博 埋蔵文化財係長 石川 悦雄 主査 飯田 博之

(宮崎県埋蔵文化財センター)

所長 矢野 剛

副所長 菊地 茂仁

副所長 岩永 哲夫

調査第一課長 面高 哲郎 調査第一係長 谷口 武範

調査第二係長 長津 宗重 総務係長 亀井 維子 主査 三谷 美徳

(調査担当)

[前ノ田村上第1] 渡部誠一郎 河野康男 [湯平田] 都成 量 山下健一 [野首第1] 堀田孝博

[野首第2] 尾園賢二 松本 茂 [老瀬坂上] 吉富俊文 阿部直人 [下耳切第3] 永田和久

今塩屋毅行 [北牛牧第5] 草薙良雄 [唐木戸第3] 山口 昇 瀬戸周成 [唐木戸第4] 永野

高行 藤木 聡 [小並第1] 栗山正明 長友久昭 [牧内第1] 松田清孝 [牧内第2] 永山博一

加藤 学 [東畦原第1] 大山博志 外山宏幸 [東畦原第2] 倉園靖浩 安藤真二

[東畦原第3] 横田通久 福松東一 [西畦原第1] 南中道隆 新町芳伸

[西畦原第2] 大村公美恵 [尾小原] 新町芳伸 原田茂樹

[確認調査] 戌亥浩志 吉本正典 下西武志 [調査員] 高木祐志 松尾有年 金丸史絵 可児直典

安楽哲史 日高敬子 落合賢一 小宇都あずさ 成相景子 辻 弥生

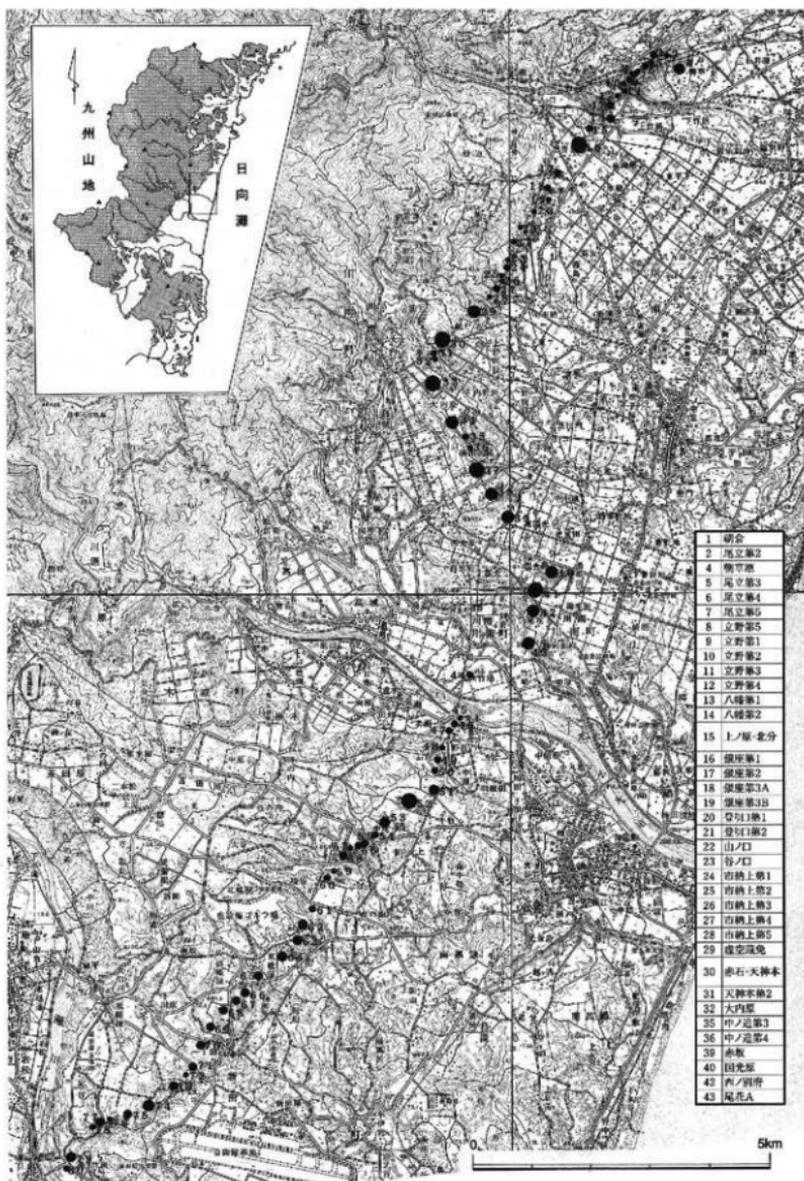


図1 東九州自動車道(都農～西部間)関通遺跡の位置

表1 東九州自動車道(高鍋~西部)追跡調査面積

番号	調査地名	所在地	調査期間	追跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	備 考
33	中ノ庄第1	川南町大字川南	13.9.12~10.15	79,800	670	13	雑草	
34	中ノ庄第2	川南町大字川南	13.10.15~11.30	20,300	720	13	雑草	
37	前ノ田村上部1	川南町大字川南	13.9.11~11.5	20,100	900	13	雑草	
38	前ノ田村上部2	川南町大字川南	13.11.10~	14,100	5,300	13	木造	調査継続
41	湯平田	川南町大字川南	13.10.2~11.29	25,000	1,350	13	雑草	
44	竹橋	高鍋町大字上江	13.10.2~10.5	7,100	2,350	13	本編	調査継続
45	青木	高鍋町大字上江	14.1.16~1.23	800	510	13	雑草	調査終了
46	野首第1	高鍋町大字上江	12.8.7~8.21 13.12.17~12.27 14.1.25~	6,800	39 145 1,600	12 13	雑草 雑草 本編	
47	野首第2	高鍋町大字上江	12.6.19~6.26 12.8.7~8.22 12.9.28~10.13 13.3.12~3.16 13.5.7~	11,700	150	12	雑草	
48	南中原第1	高鍋町大字上江		10,200	6,850	13	本編	調査継続
49	南中原第2	高鍋町大字上江		3,500				2月予定
50	志摩坂上	高鍋町大字上江	13.6.8~7.5	3,800	110	13	雑草	調査継続
51	下耳切第3	高鍋町大字上江	12.6.19~6.28 12.8.7~8.22 12.9.4~13.3.30 13.4.4~	22,500	210 6,790 7,000	12 13 13	雑草 本編 本編	
52	北平牧第5	高鍋町大字上江	12.6.15~6.28 12.8.7~8.22 12.10.2~10.11 13.2.16~2.21 12.9.4~13.3.30 13.4.4~	27,800	200 9,800 8,000	12 13	雑草 本編	
53	唐水戸第1	高鍋町大字上江		17,600				2月予定
54	唐水戸第2	高鍋町大字上江		5,600				2月予定
55	唐水戸第3	高鍋町大字上江	12.6.19~6.22 13.2.13~2.15 13.10.1~	2,900	25 2,875	12 13	雑草 本編	調査継続
56	唐水戸第4	高鍋町大字上江	12.6.19~6.22 12.8.7~8.10 13.5.7~	4,100	88 7,812	12 13	雑草 本編	
57	唐水戸第5	高鍋町大字上江		2,400				2月予定
58	小倉第1	高鍋町大字上江	13.5.13~6.8	6,500	660 7,050	13	雑草 本編	調査継続
59	小倉第2	高鍋町大字上江	13.5.13~6.8	2,700	13	13	雑草	2月予定
60	牧内第1	高鍋町大字上江	12.8.7~8.11 12.10.2~10.16 12.11.9~13.3.30 13.4.3~12.28 14.1.10~	5,800	296 2,104 3,400 3,700	12 13 13	雑草 本編 本編 本編	
61	牧内第2	高鍋町大字上江	12.8.7~8.11 13.2.5~2.14 13.6.4~6.27	8,000	56 529 4,715	12 13 13	雑草 雑草 本編	
62	音明寺第1	新富町大字新田	12.4.13~4.18 12.6.5~6.14 12.9.4~13.3.30 13.4.3~7.31	8,500	150 5,350	12 13	雑草 本編	調査終了
63	音明寺第2	新富町大字新田	12.6.5~6.14 12.7.24~8.1 12.9.4~13.2.21	16,800	200 2,100	12 13	雑草 本編	
64	東睦原第1	新富町大字新田	13.8.1~9.10 13.11.6~	14,800	712 5,088	13	雑草 本編	調査継続
65	東睦原第2	新富町大字新田	13.8.2~9.12 13.11.6~	7,200	518 3,482	13	雑草 本編	調査継続
66	東睦原第3	新富町大字新田	12.7.24~8.4 12.9.9~9.29 12.11.6~3.30 13.4.3~14.1.18	9,000	200 5,300 1,800	12 13	雑草 本編 本編	調査終了
67	西睦原第1	新富町大字新田	12.6.5~6.13 12.7.24~8.3 12.9.9~9.29 12.9.4~13.3.30 13.4.3~7.31 12.6.5~6.8	21,800	250 2,950 2,700	12 13	雑草 本編 本編	
68	西睦原第2	新富町大字新田	12.9.20~10.5 12.11.9 13.5.1~	18,300	400 7,980	12 13	雑草 本編	
69	上新田	新富町大字新田		19,900				
70	一丁田	新富町大字新田	12.7.24~8.3 13.8.3~8.20	14,900	44 104	12 13	雑草 雑草	

番号	遺跡名	所在地	調査期間	遺跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	備 考
71	跡大寺	新富町大字新田	12.4.13~4.18	16,900	370	12	確認	
			12.7.19~7.28					
72	永幸田第1	新富町大字新田	12.9.30~10.6	5,100	90	12	確認	
73	永幸田第2	新富町大字新田	12.6.5~6.12	24,600	550	12	確認	
			12.8.1~8.4					
			12.9.20~10.2					
74	尾小坂	新富町大字新田	12.3.23~3.29	25,600	928	12	確認	
			13.5.4~5.29					
			13.8.6~9.4					
75	向原第1	新富町大字新田	12.3.21~3.28	15,300	800	11	確認	
			12.9.14~9.29					
			13.11.2~11.28					
4.572	13	本掘	調査継続					
76	向原第2	新富町大字新田	13.8	7,000				
77	藤山第1	新富町大字新田		3,600	42	13	確認	
78	藤山第2	新富町大字新田	12.7.24~8.4	2,200	60	12	確認	
			12.8.4~13.1.9					
79	宮ノ敷	新富町大字新田	12.1.24~3.29	21,900	800	11	確認	
80	宮ノ前	新富町大字新田	12.8.25~9.27	200	20	12	確認	調査終了

第2節 調査地の位置

東九州自動車道の都農～西都間は、比較的低平な洪積台地上を縦断するため、多くの遺跡が経路上に所在する。現在のところ、79箇所（896,000m²）で遺跡の分布が想定されている（図1）。

今年度の主たる調査地である高鍋町、新富町西部の牛牧原、三財原といった台地は、標高約80m前後の海成段丘面で、阿多火山灰（Ata）以上の日向ローム層に覆われる。高鍋町内には、九州山地に源を発する小丸川が東に流れており、流域には沖積低地が広がる。

周辺の台地上には川南古墳群、持田古墳群、新田原古墳群といった国指定の古墳群があり、また近年、旧石器時代から中・近世に至る各時代の発掘調査資料の蓄積がみられる。

第3節 調査方法

調査に際しては、まず鍵層の鬼界アカホヤ層の残存状況がひとつの目安となる。残存している場合は、その上面で遺構が検出される場合が多く、滅失している場合は、多くは縄文時代早期以前を対象とする調査に移行していくことになる。

今年度の調査では、小林軽石（後述）を含む層以下の包含層の調査事例が多く、このため旧石器時代の調査が多数を占める状況となった。旧石器時代の遺跡は、分布の密度が低く、確認調査でも包含層の有無、密度等のデータが必ずしも正確に得られない場合も予想される。そこで10m間隔のグリッドの1/4を掘り下げ、確認を行った（「25%調査」と称する）。ある層で遺物、遺構が確認された場合は100%（全面）調査に移行する。

記録類のうち、平面位置については国土座標第Ⅱ系に基づいて設置された杭から測り出している。検出遺構は、種別毎に以下の通りの略称を用いた。

竅穴（住居跡）…SA 掘立柱建物…SB 土坑…SC
 土壌墓…SD 溝状遺構…SE 道路状遺構…SG 集石遺構…SI
 地下式横穴…ST 小穴…SH

第4節 基本層序

現在認識されている調査地（三財原台地）の基本層序は、下の柱状図の通りである。

それらのうち、鬼界アカホヤ層（K-Ah）は、耕作等により削平されている場合もあるが、鍵層として重要な役割を果たす黄褐色の火山灰土である。

桜島薩摩（Sz-S）は谷地形部などで確認できる。通常は明褐色を呈するが、低湿地ではピンク色かかることが多い。

小林軽石（Kr-Kb）は褐色ロームの中に明黄褐色、橙色のパミスを含む暗褐色部が散在する形となる。暗褐色部は固結している。

始良Tn（AT）は、基本的には黄色の火山灰であるが、白色粒が見られるところがあるなど、変異も認められる。

AT下位にはブラックバンド、あるいは「白斑ローム」と称される層があり、始良深港（A-Fm）、始良大塚（A-Ot）などのテフラが含まれる。

アワオコシ（Kr-Aw）は赤褐色のスコリアであるが、高鍋町付近が分布の北限であり、確認できない遺跡も多い。

イワオコシ（Kr-Iw）も赤褐色スコリアで、アワオコシよりも粗粒となる。

さらにその下位には、始良岩戸（A-Iw）、阿蘇4（Aso4）などのテフラの存在が想定されており、小並第1遺跡では阿蘇4の堆積が確認されている。

層	基本層序	記号	年代
I	黄土(耕作土)		
II	黒色土		
III	新世準層	Kr-Smk	AD1717
IV	黒色土		
V	高松スツア	Kr-Th	AD1235
VI	黒色土		
VII	鬼界アカホヤ	K-Ah	6.5ka
VIII	暗褐色ローム		
IX	桜島薩摩	Sz-S	11ka
XI	褐色ローム		
XII	小林軽石	Kr-Kb	15ka
遊年E段丘堆積物			
XIII	暗褐色ローム		
XIV	褐色ローム		
XV	始良Tn	AT	24.5ka
XVI	暗褐色ローム		
XVII	始良深港	A-Fm	26.5ka
XVIII	始良大塚	A-Ot	30ka
XIX	暗褐色ローム		
XX	褐色ローム		
XXI	赤褐色ローム		
XXII	アワオコシ	Kr-Aw	41ka
XXIII	明褐色ローム		
XXIV	イワオコシ	Kr-Iw	50ka
菅野段丘堆積物			
XXV	明黄褐色ローム		
XXVI	キンキラローム		
XXVII	始良岩戸	A-Iw	60ka
調査段丘堆積物			
西原段丘堆積物			
XXVIII	健甕下軽石	Kr-Ay	67ka
XXIX	阿蘇4	Aso-4	86-90ka
唐瀬段丘堆積物			
XXX	始良福山	A-Fk	88ka
新田原段丘堆積物			
XXXI	鬼界高原	K-Tz	90-95ka
XXXII	阿多	Ata	105ka
XXXIII	扇状地粘土		
XXXIV	三財原段丘堆積物		

XXVI層以下については鍵層になる可能性のあるテフラのみ記述した。

図2 三財原段丘面の基本層序

第Ⅱ章 確認調査の結果

今年度は1月末現在で、川南町内で5箇所、高鍋町内で7箇所、新富町内で6箇所、計17箇所の確認調査を実施し、うち9遺跡の本調査に着手している。

なお、下記の遺跡については、確認調査の結果、対象地内には遺物包含層が存在しないことが判明した。

4.4 だけく 竹嶋遺跡

小丸川左岸の低地内の微高地にあたる。現状では家屋と水田・畑地が混在している。

対象地内にトレンチを計11箇所設定し、掘り下げを行った。

その結果、現耕作土の下位に旧水田耕作土層が見られたが、何ら遺物は出土していない。またその下位は、砂層と礫層の互層となっており、宅地部分には客土が盛られていた。

このことから、今回の対象地は、河川の氾濫原と見られ、包含層の存在する可能性はないと判断される。

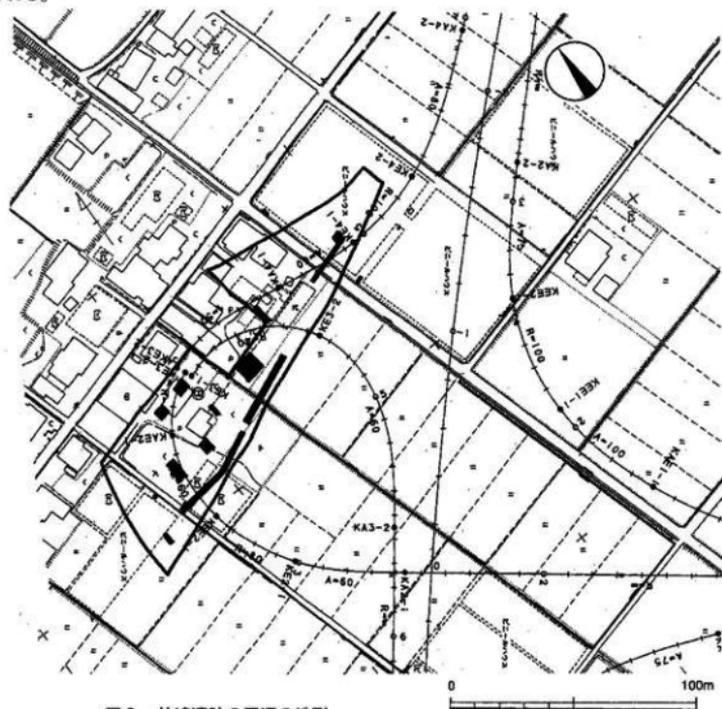


図3 竹嶋遺跡の周辺の地形

第三章 本調査の成果

第1節 川南町内の遺跡

3.7 まへのたむらかみ 前ノ田村上第1遺跡 (川南町大字川南字須田久保)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、小丸川の支流切原川と平田川の支流締打川にはさまれた十字扇状地Ⅱ面上に位置する。十字扇状地は西から東にかけて緩やかに傾斜しているが、調査地は昭和23～30年に実施された国営開田事業によって削平・造成されている。地域住民の方々の話によると、この開田事業によって、この地にあった家屋等が周辺に移設されているようである。

周辺では、北西方向に位置する白髭で旧石器時代の遺物が出土している。また、北方向に近接する舌状の台地上に位置する中ノ迫A遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭頃の堅穴住居跡1軒・土坑1基が検出された。また、現在の県道都農～綾線は、古代の官道（去飛駅～見湯駅間）とほぼ同じ経路をとったとする見解がある¹⁾。

(2) 調査の概要

平成13年12月より調査区域の南東部に位置するA区の調査を開始し、現在、表土を剥いだ後の遺構検出をしているところである。

表土には、耕作土と思われる層をはさんで2枚の水田基盤があり、褐鉄鉱斑が全体に見られる。前述の開田事業の際に、一部削平されたようであるが、標高の高い西側の一部を除いてほぼ全域に喜界アカホヤ層（Ⅵ層）とその下の黒褐色ローム層（Ⅶ層）および暗褐色ローム層（Ⅷ層）、褐色ローム層（Ⅸ層）までが残存している。さらにその下位には、フラッドロームと思われる黄褐色土層が見られ、十字扇状地Ⅱ面の段丘面である礫層へと続いている。また、A区東側の一部には黒色土層（Ⅳ層）が見られる。

遺構は、柱穴群と多数の溝状遺構が検出された。現段階では、A区全体の3割程度を精査している。ほとんどの遺構は、表土の直下にある鬼界アカホヤ層上面で検出された。旧地表面はすでに削平されていると見られる。A区東側の一部では、黒色土層（Ⅳ層）面で柱穴群が検出され、埋土中に土師器片や粘土を含むものが見られる。柱穴群はほぼ全域で見られるが、特にA区南西部に密集している（10m×6mの範囲内に49基）。埋土中から土師器片や焼土が数点検出されたものもある。

溝状遺構は、現在までに15条検出されている。まだ時代の特定や遺構の性格は把握できていないが、埋土中に土師器片や礫が見られるものや、川砂が堆積しているものもある。

遺物については、確認調査や表土剥ぎの段階で、多数の土師器、須恵器、青磁、陶磁器片などが出土している。土師器は坏、皿類が多く、須恵器は厚手で格子等の叩き目が見られるものが多い。陶磁器には13～16世紀頃の所産と見られるものがいくつか認められる。

1) 鬼塚久美子「宮崎平野の古代交通路に関する予察」『宮崎県史研究』第11号 1997

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、川南町の中央部を東西に流れる平田川と南部を流れる切原川に挟まれた国光原台地の南西部に位置し、標高は約62mである。同じ台地上の南西方向約800mの位置には川南古墳群がある。旧地形は、海岸に向かってなだらかに上がり勾配となる。現地形は、戦後基盤整備がなされ、場所によって段差が多少あるものの水田耕作によって平坦に削平され、耕作土が載せられている。

(2) 調査の概要

基本層序については、鬼界アカホヤ層（Ⅲ層）以下、褐色土層（Ⅵ層）まで残存しているが、その下位に始良Tn層（AT）が見られず、阿蘇4（Ⅸ層）の堆積が確認されている。

本遺跡では、確認調査の結果をもとに、遺構密度の高い部分を絞り込み、調査区を設定した。北側をA区と称しており、道路をはさんで西側段下をA1区とし、東側段上をA2区とした。また、南部をB区とし、南西部の飛び地をC区とした。

A1区では、鬼界アカホヤ層上面で溝状遺構が4条検出され、埋土中から石包丁や須恵器が出土している。

A2区では、Ⅱ層黒色土層で溝状遺構が5条検出され、部分的に多数の土器片が出土している区域が確認された。

B区では、黒褐色土層（Ⅳ層）の下部より尖頭器や剥片が出土している。また南端部の鬼界アカホヤ層上面で溝状遺構を1条検出している。

C区では、耕作土下より溝状遺構を1条検出し、直上及びその周辺で近世のものと思われる陶器片が出土している。また鬼界アカホヤ上面及び黒褐色土（Ⅳ層）中でも溝状遺構を各1条検出している。

(3) 小 結

検出された溝状遺構は概ね東西方向へ走っているが、走向が違うなど、時期の違いがあるものがあると思われる。個々の溝状遺構の埋土中の遺物等から掘削時期を推定すると同時に、その中のいくつかについては道路として使用された可能性があると思われるため今後、機能面での考察を加えていきたい。

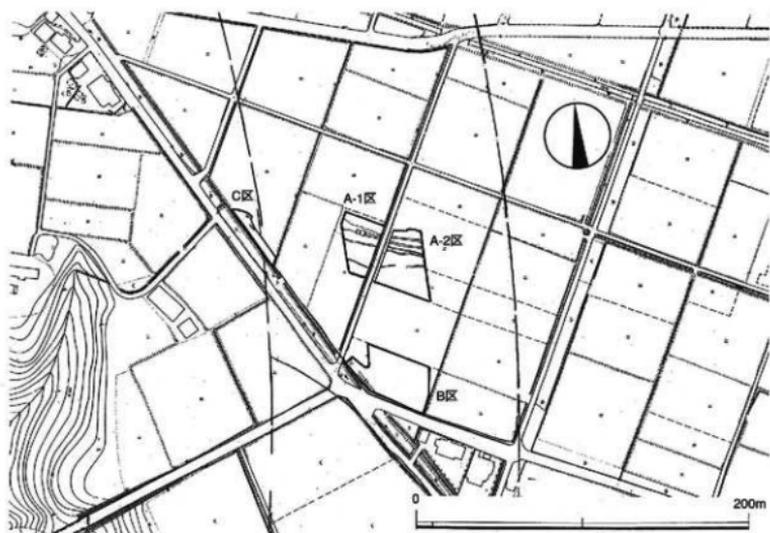


図4 湯牟田遺跡周辺の地形



写真1 溝状遺構検出状況

第2節 高鍋町内の遺跡

4.7 のくび 野首第2遺跡 (高鍋町大字上江字野首)

(1) 遺跡の立地

野首第2遺跡は、小丸川の南西に展開する段丘より派生した舌状台地上に立地する。遺跡の北側には比較的急斜度の谷地形が開析されており、旧地形もおおよそ北東方向に下る緩斜面であったことが推測される。背後に控える段丘斜面には、現在も湧水地点が散見される。

(2) 調査の概要

調査区全体をA・B・Cの三小区に分割し、現在A区を中心に、C区の調査も一部着手している。当遺跡の基本層序に関する特徴として、アカホヤ層の堆積がみられない点が挙げられる。このため、耕作土下のI層には古墳時代以降の遺物と、縄文時代早期・後期・晩期の遺物が混在する様相が観察された。ただし、縄文早期以前に帰属する遺物の包含状況が、比較的安定して確認されている。今回は、これまでに明らかとなったA区の調査成果を中心に報告する。

①後期旧石器時代の遺物

A区において包含層の下限を確認する目的で、先行して深掘りした範囲では、AT (VI層) 下位の黒色帯 (VII層) において、ホルンフェルスを用いた剥片・石核が確認された。また、A区では、ATの上位においてもナイフ形石器、角錐状石器などを含む石器群が確認されている。

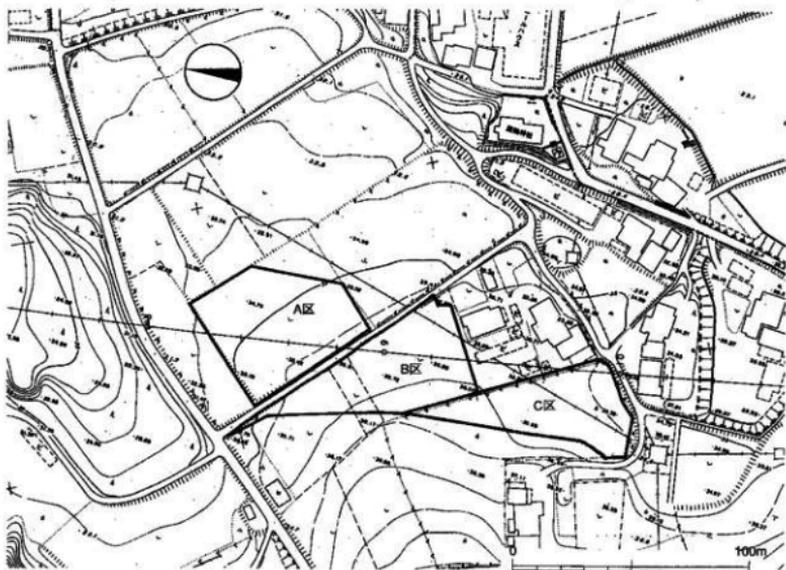


図5 野首第2遺跡の周辺の地形

②縄文時代早期の遺構・遺物

現在までに計85基の集石遺構を確認し、今後も新たに検出される可能性を残している。これらの集石遺構の上位には礫群の広がりが認められた。これらの遺構群には、押型文系土器、石鏃、石匙等の遺物が伴っている。

③縄文時代後期・晩期の遺構・遺物

後期の堅穴住居が1軒確認されている。この堅穴住居からは多くの遺物が出土したが、なかでも注目すべきは、硬玉製とみられる垂飾である。後期の遺物としては他に石斧、打ち欠きを施した礫石錘、磨石等が該当する可能性がある。縄文時代晩期の遺物としては、無刻目突帯文土器や、孔列文土器、組織痕土器などがI層を中心に包含されている。多数存在するピット群の中には、黒色磨研系土器群を埋土中に含むものが散見されるが、ピット群が秩序正しく並ぶ例は確認されていない。

なお、A区を北東-南西に走る溝状の窪地は、観察される諸特徴から自然流路と推定されるが、埋土中には縄文時代後期～晩期の遺物を中心に包含しており、この時期の景観を構成する一要素であったことが推定される。

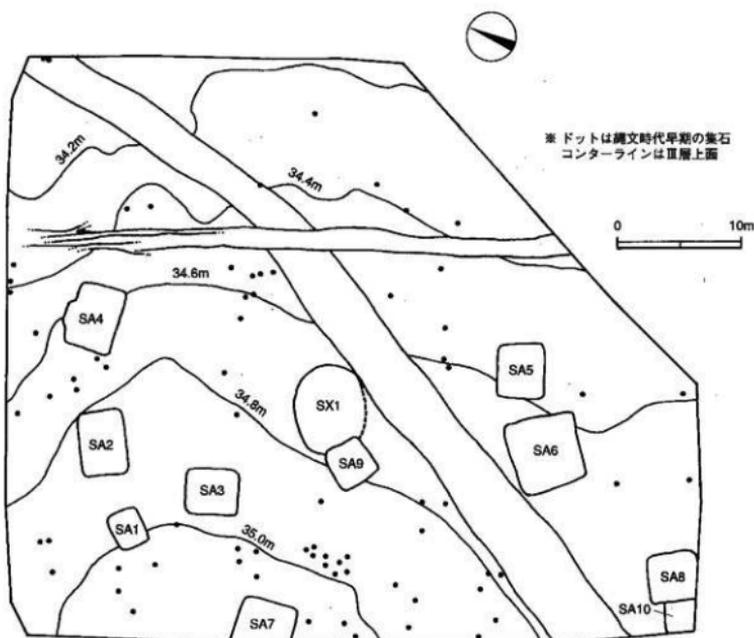
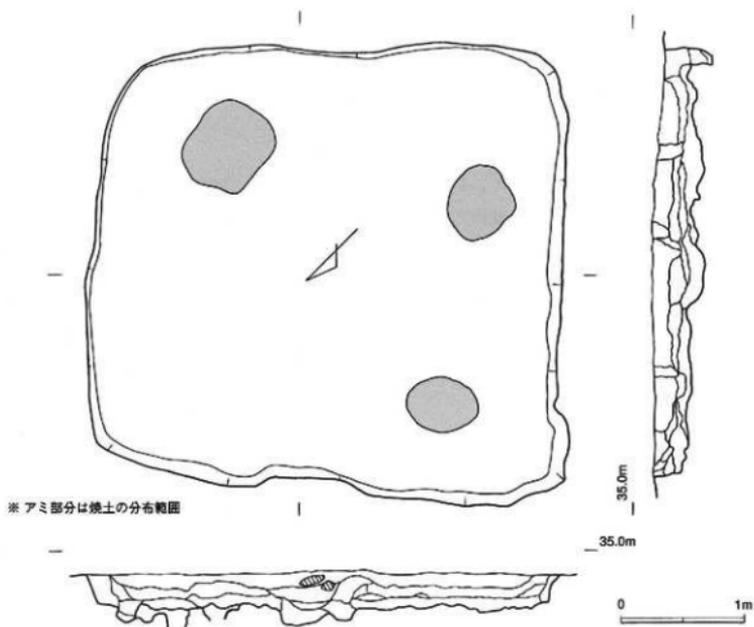


図6 A区遺構の分布 (1/400)



※ アミ部分は焼土の分布範囲

図7 古墳時代中期第9号竪穴住居跡 (S=1/40)

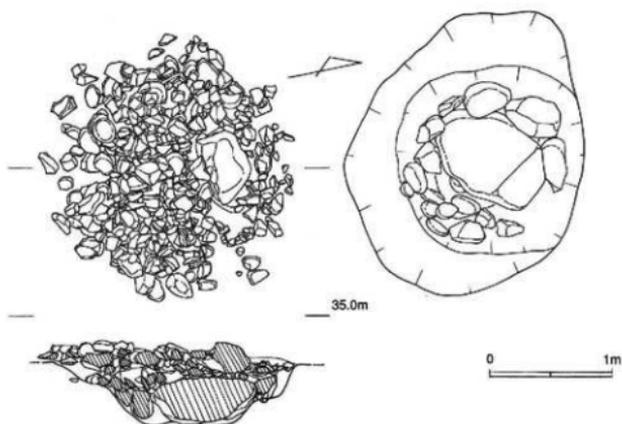


図8 縄文時代早期第18号集石遺構 (S=1/40)

④古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居跡が11軒検出された。これらは概ね古墳時代中期（5世紀代）に収まるものとみられる。いずれの住居跡も方形の平面形を呈し、床面に壁溝を有するものも認められる。その他、同時期に帰属する数基の土坑が検出された。SA7の埋土中からはTK47型式の須恵器杯蓋が出土している。

(3) 小 結

現在までに確認されたA区の調査成果のなかで、今後の調査においても留意すべき事項としては以下のようなものがある。

まず、縄文時代早期に属する集石遺構の検出数の多さとその規模である。これらの集石遺構がどれほどの時間幅に展開したものなのか、など究明すべき課題は多い。縄文時代後期の竪穴住居跡から出土したヒスイ製の垂飾品は、厳密な石材鑑定を待つ必要はあるが、当時の物資交流の解明に大きく寄与する可能性を秘めた資料である。古墳時代中期の集落に関しては、これを営んだ集団がいかなる性格を有していたのかなど、近隣の同時期遺跡との関係も考慮する必要がある。

野首第2遺跡では、調査前段階から各時代にわたる多量の考古遺物が表面採集されている。とりわけ、C区においては、A区とは対照的に古墳時代の遺物が少なく、かわって平安期の遺物の存在が目立つ点などは、時代によって集落の中心地が異なる可能性を示唆しており、興味深い。以上に指摘した諸点に留意しつつ、今後の調査を進める所存である。

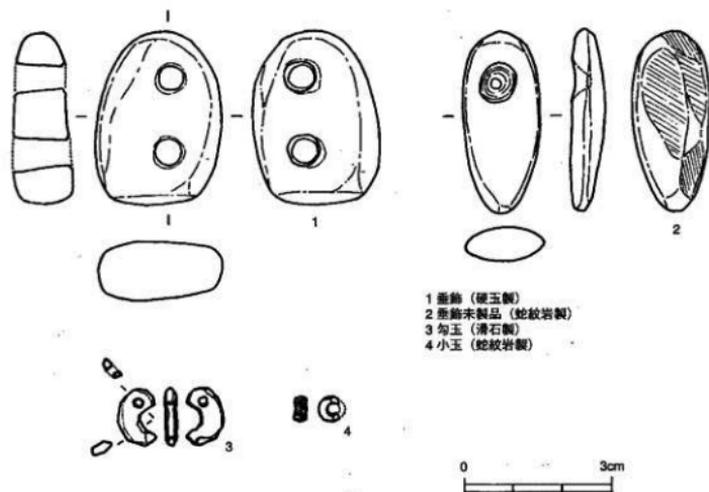


図9 縄文時代後期～晩期の玉類（1/1）

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、牛牧台地の北部縁辺の南南西にのびる尾根筋に展開する。遺跡地の標高は約92m～105mを測る。

(2) 調査の概要

表土、黒色土を剥ぎⅢ a層（鬼界アカホヤ二次堆積層）上面で現在調査中である。旧石器時代～古代の各時代の遺物が出土している。土器は縄文時代後期～晩期のものが多く、石器は石錘や石斧の出土が目立つ。旧石器時代の遺物については層序との関係からより高い位置から流れこんだものか、後の時代に攪乱を受けた可能性が考えられる。

遺構については、溝状遺構・土坑・集石等が検出されているが、多数の樹根があることと現在、調査面で顕著な土の違いが判別しにくいため遺構の検出が極めて困難である。現在トレンチを入れるなどして遺構の検出が進めている。

①旧石器時代の遺物

まだ該期の層の調査に入っていないため、遺物の点数は少ないものの、黒曜石製の細石刃核（野岳型1点を含む）、細石刃、チップ・剥片などが出土している。

②縄文時代の遺物

大別すると、前期と後期～晩期に相当する。特に後者の出土が顕著である。前期の土器としては、篝火系統の土器・曾畑式土器等、後期は市来式土器系の丸尾式土器、晩期は孔列文土器、黒色磨研の浅鉢等が出土している。

また、石斧や石錘の他、石匙・磨石・敲石・石皿・石鏃等が出土している。

③弥生時代以降の遺物

他の時代に比べると点数は少ないものの、弥生中期～後期の壺や磨製石鏃が確認された。また、古墳時代～古代の須恵器、布痕土器が出土している。

(3) 小 結

現時点では、縄文前期以前にも生活の痕跡が認められるが、中心となる時期は縄文時代の後期～晩期であろうと考えられる。ただし、住居跡等が検出できていないため、現段階では当遺跡の性格については積極的に言及できない。

このように、明確に性格付けられる遺構が検出できないのが現状である。土器がほぼ1個体出土している箇所や遺物の集中している箇所に住居等が存在している可能性があるため、今後、遺構の精査を行い、縄文前期以降の遺跡の全容をあきらかにし、IV層（黒褐色ローム層）での調査（縄文早期・草創期、旧石器時代）に進む予定である。



写真2 牛牧台地の遺跡群（南西から）



写真3 老瀬坂上遺跡近景

51 しもみきれ **下耳切第3遺跡** (高鍋町大字上江字下耳切)

(1) 遺跡の立地

下耳切第3遺跡は、小丸川南岸に広がる牛牧台地(標高約90m)の北東部縁辺に位置する。調査地は東側から続く平坦地と西側の丘陵に挟まれた谷地形部にあり、北側を開析谷に接し、南側にかけては緩やかな斜面が広がる。付近には牛牧古墳群(前方後円墳1基、円墳13基)が分布する。調査地周辺には、北に約1km離れた小丸川の低位段丘上に山王古墳群が、南へ約2kmに牛牧原遺跡があり、旧石器時代のナイフ形石器やスクレイパー等が出土している。

(2) 遺跡の概要

下耳切第3遺跡は、これまでの調査で縄文時代中期中葉、古墳時代後期～終末期及び奈良時代前半を中心とした、集落跡や墳墓群であることがわかってきた。本遺跡では調査区を便宜上、A区～F区に区分して調査を進めており、アカホヤ層上面で縄文時代、古墳時代の調査を実施している。こうした遺構は、特に調査区北側の谷部縁辺に集中していた。また、第二次世界大戦時に伴う待避壕や牛牧1号墳に掘り込まれた銃座または砲座の跡、さらに終戦後に始まった、開拓に伴う溝、バラック小屋及び井戸跡を確認している。

今後アカホヤ火山灰層直下の縄文時代早期文化層の調査を予定している。ここでは、本遺跡の概要について時代別に触れていくことにする。



図10 下耳切第3遺跡周辺の地形

①縄文時代早期の遺構

現在は部分的な調査であるが、調査区北側の谷部と接する部分で集石遺構が3基検出された。早期遺構面は試掘トレンチの結果から、谷部縁辺側に広がりが見られ、集石・散礫が広範囲に遺存していると思われる。

②縄文時代中期の遺構と遺物

竪穴住居7軒、土坑（塚）130基前後、集石遺構2基、配石遺構1基が検出されている。遺構の時期は、中期前葉から中葉（船元Ⅱ・Ⅲ式期）が主となる。

これらの遺構は竪穴住居や土坑（塚）、ピット（小穴）群が谷に向かって東西に弧状を描き、ある程度地形に沿う形で展開し、かつ個々の遺構の切りあいがほとんど認められなかった。こうした遺構群のなかでも、土坑（塚）群はある程度の分布的なまとまりが確認できる。

竪穴住居はいずれも、直径4～5mの円形プランを呈するが、中央に炉としての機能を持たず、住居内の柱穴には明確な規則性がみられなかった。また、竪穴住居の周囲にピットが巡る例もある。こうした竪穴住居群は主に、調査区の西側から中央よりに分布している。

ピット群は、出土した土器から、そのほとんどが中期前葉～中葉の時期に属するであろう。これらは調査区の東西で集中する部分があり、なかでもピットがある一定の間隔で円形に巡るピット列が認められた。この円形に巡るピット列を積極的に評価すれば、中央に炉としての機能を持たず、平地のままに構築された建物跡と考えることもできる。建物跡と推定すると、直径が約3.0～5.0mとなり、竪穴住居に比べて一回り小さい場合もある。しかし、円形に巡るピット列は、竪穴住居に伴うピットのあり方から竪穴の掘り込みが浅い、あるいは掘り込みが削平された竪穴住居に伴う可能性もあり、掘り込みなしに平地のままに構築されたかどうかを見極めるのは困難であった。

現段階では検討の余地があるにせよ、ピットが一定の間隔で円形に巡る以外に、ピットが有機的に結びつくようなあり方は確認できず、この円形に巡るピット列は、何らかの建物跡と推定しておきたい。



写真4 右：SA08（北から）



左：竪穴住居と土坑（塚）・ピット群（北から）



写真5 左：竪穴住居（SA14）と円形ピット列（東から） 右：貯蔵穴（SC42）

土坑（塚）は、便宜的に形態が長軸1.0m以上、掘り方0.2m以上を呈するものとする。これらは形態や遺物の出土状態からある程度分類が可能であるが、分類については、分布状況やまとまりも含めて今後検討していきたい。特に、形態が円形で炭化したドングリ（コナラ属）がかなりまとまって検出された土坑が2基検出された。この炭化した種子は台地に立地する遺跡としては極めて遺存状態が良好であり、土坑形態も考慮すると、2基の土坑は貯蔵施設と考えることも可能である。さらに、平面形が不整楕円形の土坑に、底部を打ち欠いた深鉢が横臥状態で出土したり、ほぼ平均した重さの石錘が10数点まとまって出土した遺構も認められた。

集石遺構は2基とも、明確な掘り方は確認されず、いわゆる散礫の範疇に含まれるもので赤化した角礫が散在していた。これらは調査区の北部に分布している。また、A区の中央部に土坑（塚）群に取り囲まれる形で、石塊や石皿をコの字形に組み合わせて一つのまとまりを示している遺構が認められ、これを配石遺構とする。

土器は中期前葉から中葉にかけての時期に比定される。その内容は船元Ⅱ・Ⅲ式やそれに類似する土器、春日式北手牧段階、及び轟B式に類似するものなど多様である。特に九州地方南部に主体的に分布する深溝式の出土が見られないこと、船元Ⅱ・Ⅲ式やそれに類似する土器を含めた、いわゆる船元式系土器が組成の約8割を占めることは興味深い。また、土器片錘が数点出土している。

石器に関しては、土器の出土状況からその多くが中期前葉から中葉に位置付けられよう。打製石鏃、打製石斧、石錐、石匙、石錘、敲石、磨石、石皿、台石等が出土している。特に、石錘や敲石、石皿、磨石が多く出土し、こうした石器のあり方は、遺構の多さともあわせて定住的な集落の様相を示していると考えられる。

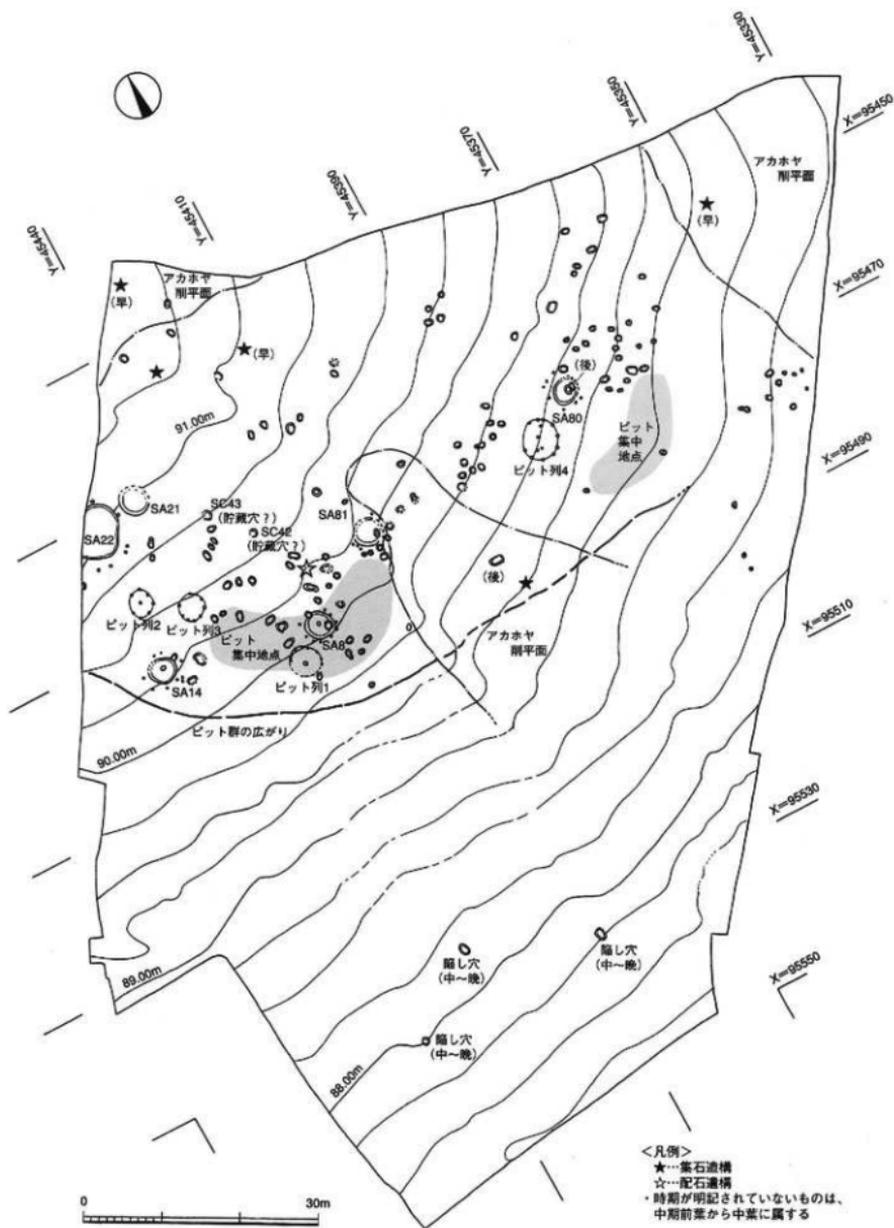


図11 下耳切第3遺跡 縄文時代中期遺構の分布 (1/600)

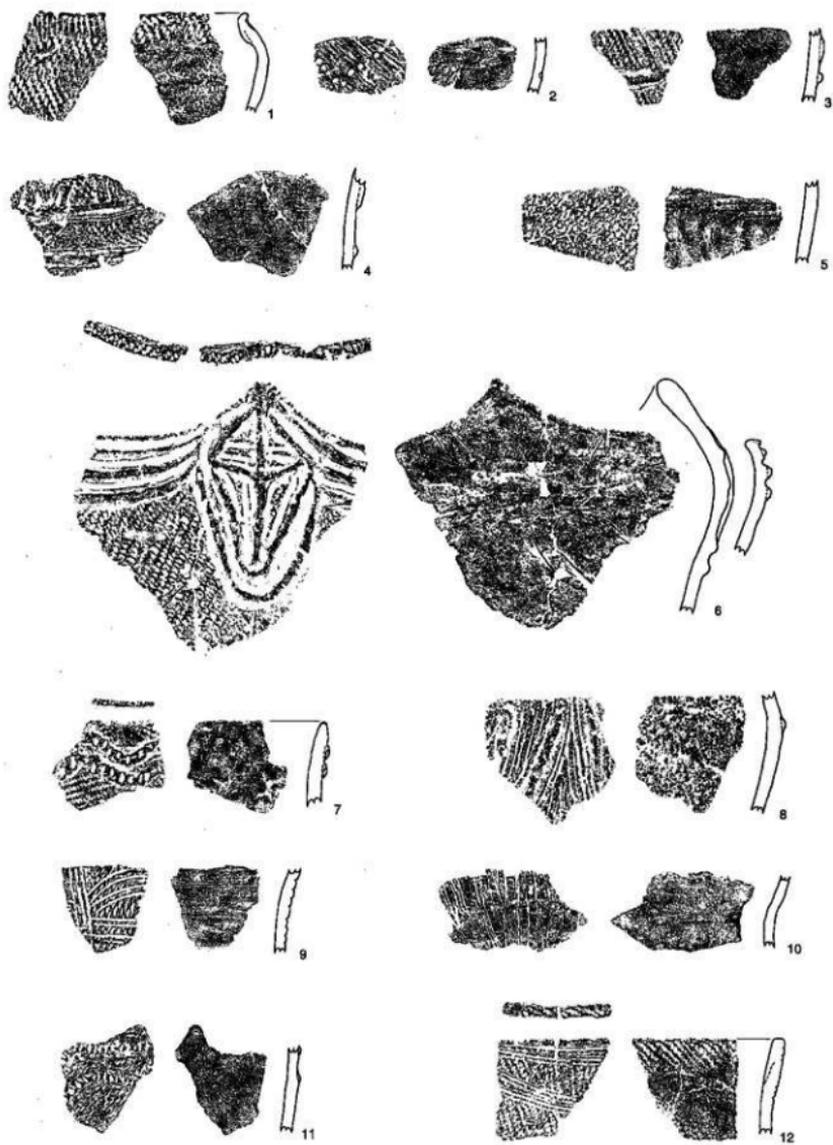


图12 下耳切第3遺跡出土縄文土器(1) (1/3)

0 10cm

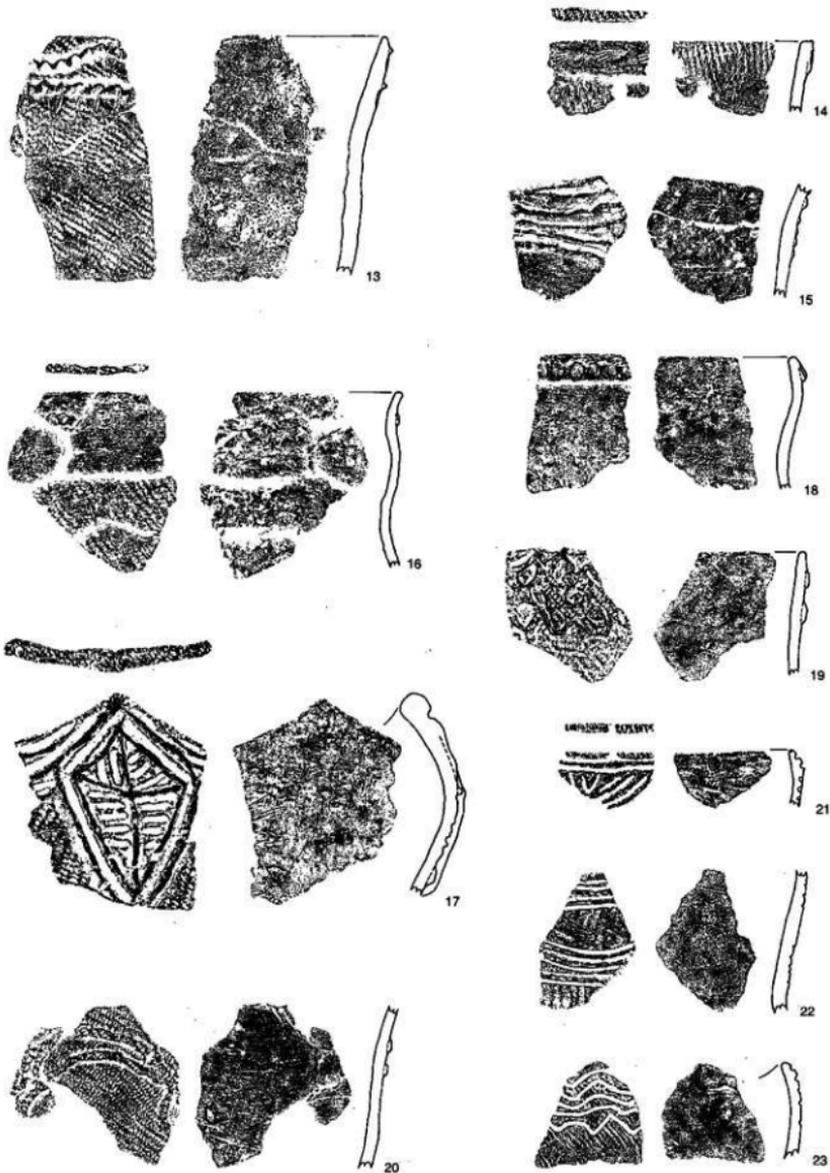


图13 下耳切第3遺跡出土縄文土器(2) (1/3)

③縄文時代後・晩期の遺構と遺物

後期の遺構は土坑(墳)2基を数えるのみである。そのうち、1基は形態が隅丸長方形で、後葉の三万田式に併行すると思われる粗製深鉢が横位状態で出土した。

なお、牛牧1号墳の南側に陥し穴が3基検出された。3基とも形態が楕円形、深さは2mほどで始良Tn層まで達しており、床面からは逆茂木の跡も確認できた。陥し穴の時期については、出土遺物がないため時期比定が困難だが、アカホヤ層上面から掘り込まれている点や、周辺の状況から中期ないし後・晩期にあたると思われる。

また、後・晩期に属する遺物は少なく、後期後葉の粗製土器や晩期の孔列文土器が数点出土したに過ぎない。

④古墳時代～古代の遺構と遺物

古墳時代後期～古代初頭の遺構として竪穴住居75軒、掘立柱建物49軒の集落跡、古墳時代終末期の遺構として古墳2基、地下式横穴墓8基、土墳墓3基、馬塚土坑2基で構成する墳墓群が検出された。ここでは、集落と墳墓群に大きく分けて述べていく。

古墳時代から古代初頭の集落

古墳時代後期～古代初頭の集落は竪穴住居と掘立柱建物で構成され、これらは調査区内で牛牧1号墳と北側の谷に挟まれる形で東西方向へ展開する。

竪穴住居の平面形は方形で、一辺の長さから大型(6～7m前後)、中型(5m前後)、小型(4m以下)に分けられる。時期的に新しいほど小型の住居が多くなる傾向を示すが、7世紀前半～中頃の時期では大型の住居が多い傾向を示した。

ほとんどの住居は貼床が施され、主柱穴は4本が一般的で、6本のものもみられた。この貼床を除去すると、住居の建替や拡張を示す柱穴が検出される竪穴住居もある。懸帯溝は全時期を通じて見られ、溝の中に杭痕が確認された住居もある。また、壁帯溝と住居の掘り方の間に土壁が存在する場合もみられた。さらに、住居の掘り方周囲に垂木の跡や、竪穴住居の南側の部分に河原石や土による「土間」状遺構が検出されたものもある。

本遺跡の場合、竪穴住居の火処として地床炉、土器埋設炉及びカマドの設置を指摘できるが、屋内にカマドと土器埋設炉が並存する例も少なくない。土器埋設炉とは、住居の中央部分に土師器甕を埋め込んだ炉である。竪穴住居の切りあいや個々の時期を時系列的に並べた場合、火処の変遷として「地床炉→土器埋設炉(埋甕)→カマドと土器埋設炉→カマドのみ」という図式が想定できる。本遺跡では、カマドは7世紀初頃頃に導入されるが、土器埋設炉自体は6世紀後半から7世紀末にかけて存続し、8世紀代には消滅すると考えられる。土器埋設炉は土層断面の観察から、甕の内部で弱い火力での継続的な火の使用が認められ、機能としては照明、暖炉、火種の管理、さらには煮沸などが想定できる。土器埋設炉の付近に焼土ピットが検出される例もあり、甕内外に生じた焼土や炭化物を随時掻きだしていたと推定される。竪穴住居内で土器埋設炉が数度作り変えられている例、土器埋設炉廃絶時の祭祀行為が認められる例、さらにカマドの焚き口部分に甕が埋め込まれている例などは興味深く、性格付けが今後の課題となる。

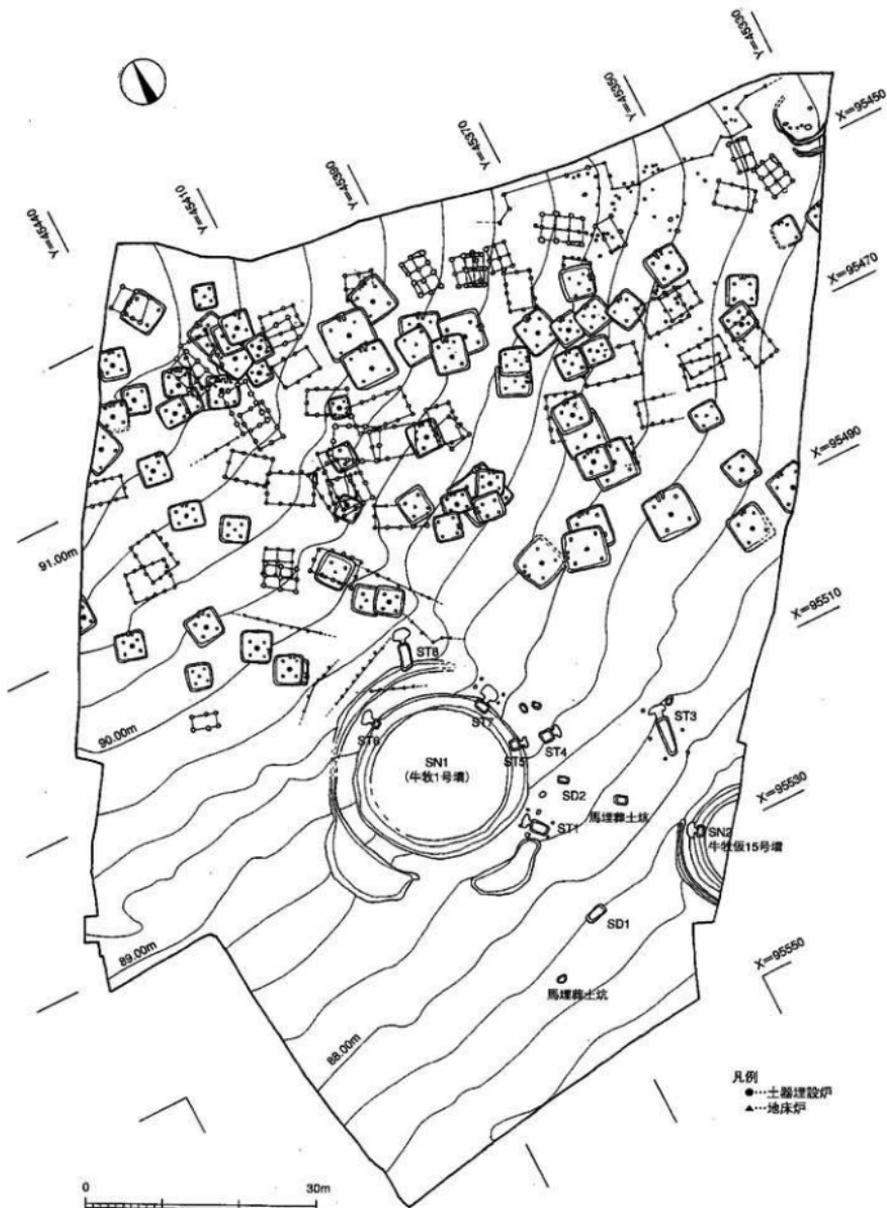


図14 下耳切第3遺跡 古墳時代遺構の分布 (1/600)

掘立柱建物は2×2間、2×3間の総柱建物、1×2間、2×3間、2×4間及び3×4間の側柱建物が検出された。柱掘り方の平面形は全て円形である。総柱建物や側柱建物に一部布掘り状の柱掘り方を有するものがある。掘立柱建物の主軸方向から、主軸を北にそろえる一群、東西方向にそろえる一群及び45°～60°振れる一群に大別できる。調査区の中央付近に側柱建物群（居宅群）が、北東側に総柱建物群（倉庫群）が集中するあり方を示している。こうした掘立柱建物は、堅穴住居に並行または後続する形で展開し、一部横列も確認した。

集落全体の規模は、遺跡の立地からおおよそ堅穴住居100軒前後と推定される。堅穴住居の多くは、4～5軒のまとまりで切りあいが認められ、さらにいくつかのまとまりを指摘することができる。またカマド等の主軸方向に真北、北東、北西、東、西方向など、ある程度の方向性がみられること、掘立柱建物の主軸方向や出土遺物の時期を考慮すると、現時点では集落の変遷を大きく6世紀後半、7世紀前半～中頃、7世紀後半、8世紀前半の4時期に想定している。集落の構成は数軒の堅穴住居ないし側柱建物（居宅）と総柱建物（倉庫）を伴うまとまりを想定している。あくまでの現段階の推定であり、個々の遺構の切りあい関係や遺物の検討を踏まえた上で、遺構の同時性や前後関係を把握して、集落の変遷過程を明らかにしていきたい。

集落から出土した遺物は須恵器・土師器・鉄鎌・鉄鏝等があるが、鉄器や玉類の出土は僅少である。土師器甕はカマドの定着により、長胴化する傾向を看取することができる。

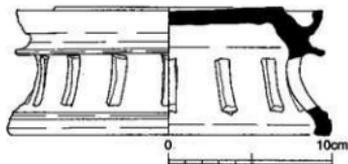


図15 SA 74出土円面硯（1/3）

一方、特殊遺物として円面硯が挙げられる。SA 74より出土した。硯部径14cm、脚台部径19.6cm、器高10cmを測る。陸部が外縁（堤）よりも高く、脚台部に16個の長方形の透かしが入る。

器形は全体的に低く、しっかりとしたつくりである。概ね8世紀前半の所産と推測される。宮崎県内では西都市の寺崎遺跡（日向国庁推定地）、宮崎市北ノ追遺跡に次ぐ3例目で、確実に集落跡から出土した初めての例となる。古墳時代から古代における地域社会の様相を知る上で重要な遺物となりえる。

古墳時代終末期の墳墓群

牛牧1号墳は、円墳で墳丘径約19m、高さは約2mを測る。周溝は二重に巡り、周溝を含めた直径は約38mとなる。内周溝は幅も狭く深いが、外周溝は幅の広い割には浅い。主体部は4基確認され、全て川原石を四隅に配置した棺台の上に置かれた木棺直葬である。人骨は検出されなかった。墓塚の四隅や頭部の方向にビットが見られた。遺物は須恵器の蓋杯、耳環、勾玉、鉄鎌、刀子が出土し、木棺に使用されたとみられる鉄釘が一部検出された。須恵器の蓋杯は西都市酒元ノ上横穴墓群の例のように、頭部付近に枕状に伏せて置かれていた。この4主体部は須恵器の年代から7世紀初めから前半の間に、墳頂部の北から南へと次々に埋葬されたと考えられる。また、古墳土層断面の観察では、墳丘基底面から黒色土、アカホヤ層ブロックと黒色土の混合土、褐色ブロック土、黒色土に大きく4つの盛土工程に分かれ、土堤状盛土技法も認められた。



写真6 下耳切第3遺跡全景（北西から）



写真7 左: SA 41



右: SA 40土器埋設炉



写真 8 左：堅穴住居の重なり合い



右：掘立柱建物

牛牧1号墳の東側の内・外周溝付近には地下式横穴墓が集中するが、西側には地下式横穴墓は造られず、逆に古墳の祭祀に関係する破砕された土器が大量に出土した。古墳主体部の主軸を中心に東側が地下式横穴墓の空間（墓域）、西側が古墳祭祀の空間と見ることが出来る。

さらに牛牧1号墳から東側の調査区境界付近で、新たに滅失古墳を1基確認した。ここでは仮15号墳と呼称する。既に墳丘が失われ、主体部の確認は出来なかった。また牛牧1号墳と同じく周溝が二重に巡り、墳丘径約12m、周溝を含めた大きさは約15mとなる。内周溝より須恵器の高杯、提瓶片が出土した。また、7世紀後半頃の須恵器高台付椀が牛牧1号墳、仮15号墳共に周溝内より出土している点からこの時期まで何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

地下式横穴墓は現在8基確認しており、その分布は牛牧1号墳の周溝内に4基、隣接して2基、仮15号墳の周溝内に1基、牛牧1号・仮15号墳との間に単独で1基存在する。これらの地下式横穴墓は玄室平面が楕円形の平入り型で、堅坑は方形のもの、横穴墓の「墓道」のように主軸方向に長く伸びたもの、堅坑にスロープが接続した形状をなすものがある。閉塞には木板、土塊、石を用い、玄室床面には第3・5・6号地下式横穴墓のように河原石を敷き詰め裸床としたり、第1・7号地下式横穴墓では牛牧1号墳主体部にみられるような棺台状に石を配置するものもある。出土遺物は須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・刀子・耳環等があり、造営期間は須恵器の時期から7世紀前半代の範疇と考えられる。土層や遺物から追葬の痕跡や「片付け」行為も推定できる地下式横穴墓もみられた。なお、第1号地下式横穴墓等のようにピットが墓全体を囲むような例もある。

古墳周溝内の地下式横穴墓は墳丘外に玄室を向ける形で周溝の壁を掘り込むもので、土層観察から古墳築造後、ある程度周溝が埋没した時点で地下式横穴墓を築造したと考えられ、古墳に従属ないし寄生するようなあり方を示している。前述のように、牛牧1号墳の場合は古墳主体部の主軸を中心に東側に集中し、さらに主軸延長上の北側から南側に向けて45°ずつ均等に地下式横穴墓を配するような墓域構成が認められる。

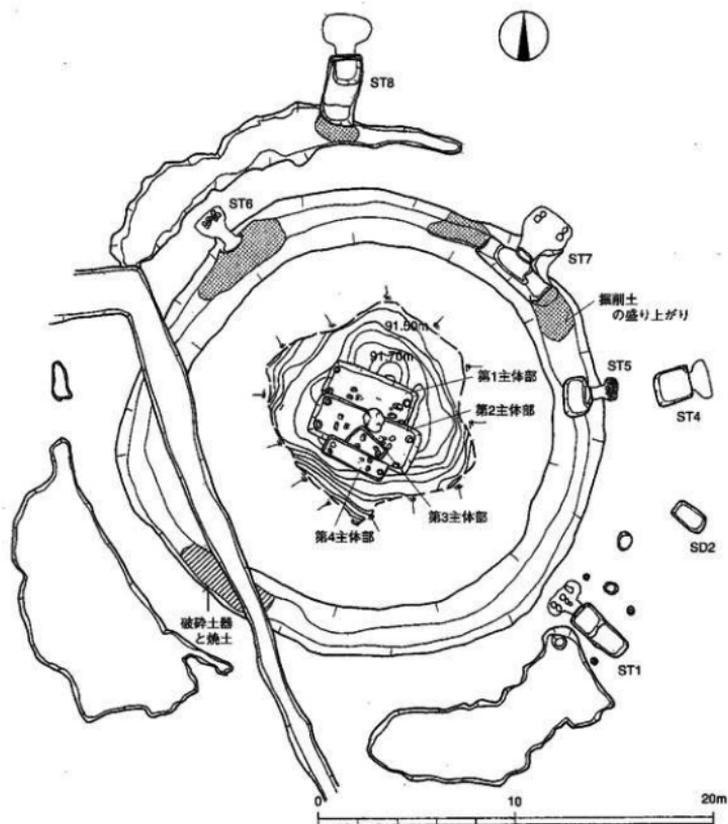


図16 牛牧1号墳と地下式横穴墓 (1/250)

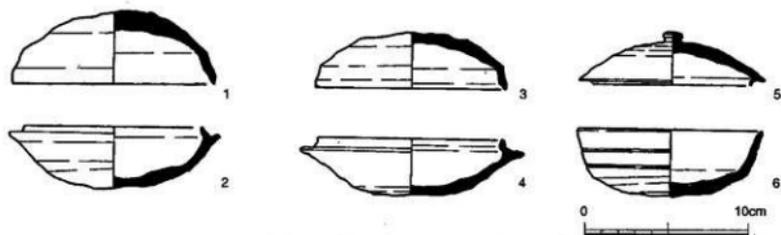


図17 牛牧1号墳主体部出土須恵器 (1/3)

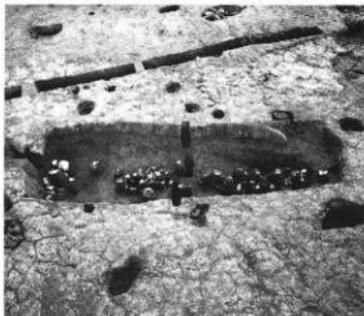


写真9 右：ST3 遺物出土状況



右：同完掘状況

第1、3、8号地下式横穴墓の「墓道」のような形状の堅坑内には大量の土器が出土し、その出土状況から土器の供献行為、破砕行為、さらに第7号地下式横穴墓堅坑付近には土器が並べ置かれた状況から土器供献行為が推定され地下式横穴墓の葬送儀礼のあり方が伺われる。

また、牛牧第6～8号地下式横穴墓は堅坑の入り口付近に墓の位置を表示するような掘削土の高まりの存在もあり、古墳の周溝を墓道として利用した可能性がある。さらに第5～7号地下式横穴墓が示すように従来の堅坑の機能が薄れ、痕跡的や省略的になるものや、逆に掘削土を盛り上げて壮観化する例もみられた。なお、第3号地下式横穴墓堅坑内の須恵器甕片が牛牧1号墳墳頂部出土のものと同接するという興味深い結果も得られた。

第1号地下式横穴墓の東隣にある土壙墓からは、須恵器・刀子・切子玉・耳環が出土した。須恵器から時期は7世紀前半である。さらに牛牧1号墳の南側にある馬埴葬土坑からは甕が出土した。

こうした集落の南側に展開する墳墓群は、遺物の年代から7世紀前半代と集落の開始時期よりやや後出し、墳墓群が集落にかなり近接して展開するあり方をしめす。

(3) 小 結

下耳切第3遺跡では、縄文時代中期の集落と、古墳時代後期から奈良時代の集落と古墳時代終末期の墳墓群が検出された。

縄文時代では、特に、中期前葉から中葉（船元Ⅱ・Ⅲ式期）の堅穴住居、土坑（竈）をはじめ、多くの遺構が検出された。当該期の宮崎県下での集落遺跡は、田野町天神河内第1遺跡、高鍋町大戸ノ口第2遺跡などが挙げられるが、遺跡数が他の時期に比べて少なく、遺跡規模も小さい。こうした様相は、一般的に西日本地方にも当てはまる。

さて、下耳切第3遺跡の中期に対する評価として、まず、時期的には中期前葉から中葉（船元Ⅱ・Ⅲ式）が主体で、比較的時期が限られること、また、古墳時代以降の改変を考慮する必要があるが、遺構配置を見ると、堅穴住居や土坑（竈）、ピット（小穴）群が谷に向かって東西に弧状を描くように展開し、ある程度、地形に沿うように形成されていることが挙げられる。

こうした遺構配置のあり方が、時期的や地域的にどのように位置づけられるかという点について

は、今後検討すべき課題としたい。

さらに、土器のあり方から見ると、船元Ⅱ・Ⅲ式とそれに類似する土器群、春日式北手牧段階、轟B式に類似する土器群が出土しており、いわゆる船元式系土器が約8割を占めていることが挙げられる。今後、遺構内での出土状況等に違いが見られるかどうか明らかにしていきたい。

このように、縄文時代については中期前葉から中葉をピークに早期から断続的に集落が営まれ、特に、中期に関して多くの成果がみられた。

一方、古墳時代から古代にかけての集落が検出されたことは、特に古墳時代から律令国家成立前後（7～8世紀）の人々の生活や社会を考える上でも貴重な遺跡と考えられる。

前述のように集落の南側に位置する墳墓群は7世紀前半代と、集落の開始時期よりやや後出し、集落にかなり近接していることや、集落が墳墓群と谷に挟まれた狭い空間で展開する点の特筆される。集落と墓地との関係やそれらの構造を考える上で興味深い。

牛牧1号墳や仮15号墳は円形に二重に巡る周溝を有することが明らかになった。宮崎県下では新宮町蔵園古墳群、北原古墳群、西都市鬼の窟古墳などが知られている。主体部の構造や地下式横穴墓との重なり合いは、古墳の終末の様相を考える上で新しい知見をもたらした。さらに古墳の周溝を掘り込んで築造するという、古墳と地下式横穴墓の重なり合いは類例がそれほど多くなく、牛牧1号墳に示されるような墳丘にも確実に埋葬されたと確認できたのは、他に鹿児島県串良町の岡崎4号墳を挙げる程である。本遺跡では、古墳主体部と地下式横穴墓の副葬品が等質的で格差があまり見出せない点を含めて古墳と地下式横穴墓にそれぞれ葬られた人々の関係が注目される。

最近、西都市酒元ノ上横穴墓群や堂ヶ嶋第2遺跡では、「地下式横穴墓」が「横穴墓」に変化していく過程が明らかになっている。ほぼ同じ頃か後出して古墳や地下式横穴墓が造営された下耳切第3遺跡では堅坑が横穴墓のように「墓道」状化したり、堅坑内の祭祀が推定されるなど、古墳時代終末期における地下式横穴墓のあり方を知る数少ない例となった。また、本遺跡の地下式横穴墓は小丸川南岸での検出例となり、地下式横穴墓分布圏の北限がさらに変更される結果をもたらした。第1号地下式横穴墓等では墓全体を囲むようにピットが検出され、同じく牛牧1号墳主体部墓域にピットがみられた。現段階では、こうしたピットは墓標や結果、葬送儀礼に伴う小屋等の柱穴と推定される。今後の資料の蓄積や調査の進展に期す部分が多い。下耳切第3遺跡は、古墳や地下式横穴墓が終焉を迎える頃の墓制の様相や当時の人々が住む集落の実態、墓地と集落との関係など、古墳時代から古代における地域社会を解き明かす上で重要な遺跡と考えられる。

きたうしまさ
5 2 北牛牧第5遺跡 第2次調査 (高鍋町大字上江字北牛牧)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は下耳切第3遺跡の南西隣の牛牧原台地上にある。平坦地と西側の丘陵地に挟まれた扇状地の東端にあたり、北から南へと緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

平成12年度の第1次調査では、後期旧石器時代の陥し穴、礫群が検出され、石器約1,000点（今舛型ナイフ、三稜尖頭器等）が出土している。また縄文早期・草創期の集石、陥し穴、土坑も確認され、石鏃、有舌尖頭器等の石器が約100点出土している。

今年度の第2次調査では、遺跡内北部のA1区、A2区について実施した。A1区では耕作により鬼界アカホヤ層（Ⅲ層）下部まで削平を受けていた。黒褐色ロームのV層では、黒色土埋土のシミ状遺構が全域で確認されたが、大部分は深さ5～10cm程度のものであり、明確に遺構と判断できるものはわずかであった。

一方、A2区では、植樹により部分的に始良Tn層（Ⅳ層）まで削平を受けていた。そのため、VIa層上面がわずかに残っていた約500m²について調査を実施した。遺物包含層はⅢ層上面、V層、VI層（小林軽石、a、b、c3層に細分できる）である。

①後期旧石器時代の遺物

小林軽石上部のVIa層より細石刃核が1点、VIa層からV層上下にわたって細石刃が5点出土した。石材はいずれも黒曜石である。また、小林軽石中部のVIb層から剥片尖頭器（ホルンフェルス製）が1点、剥片16点が出土している。



写真10 北牛牧第5遺跡全景

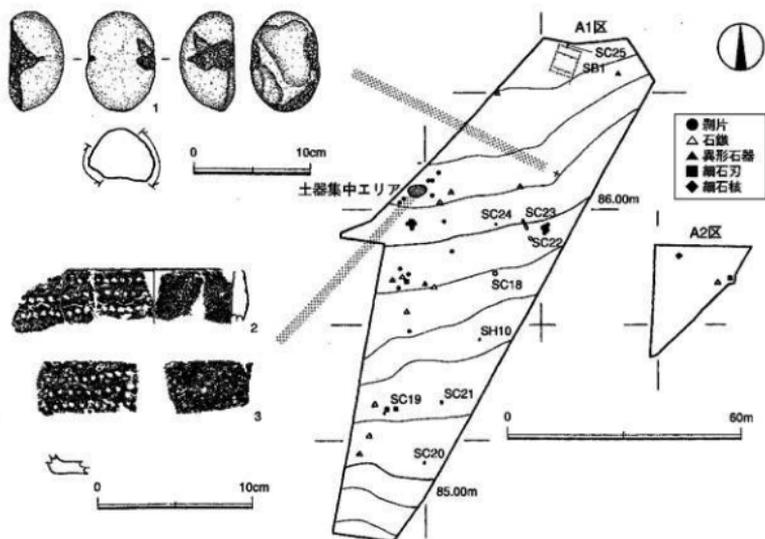


図18 北牛牧第5遺物 遺物出土位置と遺物 (1/1200)

②縄文時代早期・草創期の遺物

A1区北西部に土器片の集中箇所が見られた。東西約5m、南北約3mの範囲にわたって、30点ほどの小片が傾斜に沿うように出土している。うち3点は口縁部と見られ、外面に横方向の連続刺突文が三段あり、その間に波状文が施文されている。また、推定される口径は10cm前後であることから、平椀式の壺型土器であると考えられる。

一方、石器では石鏃が8点検出された。長径が1cm程度と、やや小振りになるのが特徴である。また、チャート製の異形石器が2点認められた。1については、砂岩製で短軸の両側の加工が特徴的である。周辺から石鏃が出土していることから、狩猟具として使用されたのではないかと推察される。

以上の他、埋土に焼土が含まれる土坑が3基検出された。いずれも検出面上部が削平を受けており所属時期は不明である。また、A1区北端で掘立柱建物跡が1軒検出された。2間×3間で南北の二面に庇が付く。総長は約6×7mで、柱穴は径約20~30cm、深さは30cm前後であった。埋土から判断して近世以降のものと考えられる。

(3) 小 結

遺構・遺物に関して、石鏃や剥片尖頭器等が単独で出土し、チップ等が見られないこと、また明確な居住関連の遺構は確認できなかった点が指摘できる。今後、他遺跡との比較や出土遺物についての検討を加え、本遺跡の特徴を究明していきたい。

(1) 遺跡の立地

唐木戸第3遺跡は、高鍋町の西方、宮田川左岸の三財原台地縁辺部（標高約85m）に位置する。遺跡の南西側は標高差約14mの段丘崖になっており、深年Ⅱ段丘面（唐木戸第4遺跡）を眼下に臨む。

本調査地は、戦前は松が生い茂っていたようであるが、戦後もなく土地の造成が行われ、丘陵の高まった部分が削平されて、平坦な現地形となった。

(2) 調査の概要

本遺跡の層序は、表土下の鬼界アカホヤ層（Ⅱ層）からイワオコシ層（Ⅹ層）まで、一部の層を除いてはほぼ当地の基本層序に従ったものとなっている。ただし、南西部の斜面では小林軽石を含む褐色土層（Ⅴb層）からアワオコシ層までが確認されていない。鍵層としては前述の鬼界アカホヤ層（Ⅱ層）、小林軽石を含む褐色土層（Ⅴb層）、始良Tn層（Ⅶc層）、イワオコシ層（Ⅹ層）などが確認されている。遺物包含層は、Ⅱ層下の黒褐色土層（Ⅲ層）と暗褐色土層（Ⅳ層）、褐色土層（Ⅴa層）、小林軽石を含む褐色土層（Ⅴb層）ととらえている。

今回、調査区を南西部と北東部の2区（A区及びB区）に分けて調査を進めており、現在、南西部のA区についてⅤa層及びⅤb層の調査中である。

①後期旧石器時代の遺構・遺物

現在調査中であるが、これまでに遺構としては、焼土を伴う土坑1基を含む5基が検出されている。また遺物は、ナイフ形石器、細石刃、スクレイパー、礫器、角錐状石器、台石などが出土しており、石核、細石刃核、剥片等を含めると約350点余に上る。出土遺物の特色として、5cm以上の大形の剥片等が多いという点が挙げられる。

②縄文時代早期の遺構・遺物

Ⅲ層からⅣ層にかけて検出された遺構・遺物のほとんどが縄文時代早期のものと考えられており、現段階では草創期の遺物は特定できていない。遺構は、集石遺構17基、焼土を伴う土坑3基を含めて土坑8基が検出されている。集石遺構は、北東部の平坦地から7基、南西部斜面から10基検出された。それら遺構の周辺には散礫が広がっている。遺構の検出面及び礫の特徴（大きさや石材等）などから、それらの遺構はほぼ同時代のものと考えている。

また遺物としては土器片（貝殻条痕文土器など）、姫島産のものを含む黒曜石やチャート、ホルンフェルス、頁岩等を石材とするチップや剥片、石核など約270点余の遺物が出土している。ただし石鏃等の石器は数点見られたのみである。

(3) 小 結

本遺跡の性格等は、隣接する遺跡の調査結果及び本遺跡の調査終了をまって言及されるべきであるが、現在まで、縄文時代早期に関して、調理用の施設跡と思われる集石遺構や焼土を伴う土坑が多く検出されていること、剥片類が多く出土しているものの製品が少ないことなどが指摘できる。



写真11 唐木戸第3遺跡全景（南西から）



図19 A区Ⅲ層～Ⅳ層遺物分布図（1/500）

56 からきど 唐木戸第4遺跡 (高鍋町大字上江字北唐木戸)

(1) 遺跡の立地

唐木戸第4遺跡は、牛牧台地の南西を開析する宮田川に面した、標高約70mの帯状の河岸段丘(深年Ⅱ面)上に立地する。前項の唐木戸第3遺跡の南西に位置する。調査地は畑地として平坦に削平されていたが、旧地形は、丘陵と沢・湿地に分かれる複雑な微地形であった。

(2) 調査の概要

本遺跡の土層堆積は、宮崎層群を最下層とし、その上には、河川に伴う礫層(Ⅴ層)・砂礫層(Ⅵ層)が堆積する。小林軽石を含む褐色土層(Ⅶ層)の時期には、河川規模は縮小して沢となり、帯状の河岸段丘面に沢と湿地・丘陵が明確となる。湿地には薩摩火山灰が堆積する。アカホヤ火山灰(Ⅳ層)降灰以降の状況は、近・現代の削平によって、沢・湿地でのみ明確である。沢は、縄文時代後期には埋没し、クロボク(Ⅲ層)が形成される。クロボクの最上部には、高原スコリアの混じる黒色土層(Ⅱ層)がある。

包含層は、古い方から後期旧石器時代のⅧ層、縄文時代草創期から早期のⅥ層、縄文時代後期のⅢ層であり、Ⅴ層以下で遺物・遺構は確認されなかった。



写真12

左上：唐木戸第3遺跡より唐木戸第4遺跡をのぞむ

左下：唐木戸第4遺跡の土層堆積(低地)

右：唐木戸第4遺跡俯瞰(写真上が北)



写真13 左上:Ⅵ層上部の散礫検出状況(西より) 右上:Ⅵ層上部の集石検出状況(南より)
 左下:Ⅵ層上部の集石の精査(南より) 右下:炉穴の検出状況(南より)

①後期旧石器時代後半

Ⅶb～Ⅶ層中に包含される。遺構は、露出した礫層の礫などを用いた礫群9基がある。礫群構成礫は、河原に近い状況であったためか、礫径が大きい。礫群周辺では、角錐状石器を主体とする石器ブロックが検出された。石器石材には、頁岩をはじめ、一ツ瀬・小丸川など近辺の河川で採取可能なものが用いられる。本遺跡で最初に確認される人の痕跡である。

②縄文時代草創期前半

Ⅶa～Ⅶ層中に包含される。植生環境は、花粉分析の結果、該期の遺跡周辺は草原であり、ハンノキなど若干の雑木が生える程度の草原主体であり、湿地にはヨシなどが生えていた。遺構は、陥し穴1基と礫群2基がある。遺物は、黒曜石製細石刃石器群とチャート製の石鏃などがある。細石刃石器群は、後期旧石器時代最終末と縄文時代草創期前半に分離できる可能性がある。

③縄文時代草創期後半から早期

丘陵頂部から東斜面にかけて、数千点を超す散礫・集石21基・炉穴6基が検出された。遺物は、数多くの石鏃とともに少量の土器が出土している。丘陵北斜面では、総数5000点を超すチャート製石鏃・石鏃未製品・剥片・砕片などが出土し、石鏃製作地と考えられる。斜面を下った湿地周辺では、遺構はなく、石鏃が単独で出土した。石鏃を使用した狩猟の場と考えられる。



写真14 左上:Ⅶ層上面の礫群検出状況
左下:Ⅶ層中の礫群検出状況

右上:Ⅶ層上面の地滑りで壊れた礫群検出状況
右下:陥し穴の掘り割り

④縄文時代後期

沢は縄文時代後期には埋没し、ある程度の平地が形成される。その平地から、粗製深鉢・スクレイパーなど少量の遺物が出土した。遺構はない。

⑤その他の時代

表土中から古代の須恵器坏、近・現代の陶磁器類が出土した。

(3) 小 結

本遺跡では、今回の調査の結果、縄文時代草創期後半から早期に主体があると判明した。とくに、検出遺構・出土遺物の違いから、集石や炉穴群の形成される丘陵と、石鏃製作址である丘陵斜面、石鏃使用の狩猟の場である湿地といった、遺物・遺構の展開と地形差に見られる相関から、場の機能の想定ができたことは注目される。

また、遺跡全体での遺物組成は、石鏃・少量の土器が主体となる。他遺跡の遺物組成と比較した場合、大きいもの・重量のあるもの一すなわち、大量の土器、石皿・磨石といった重量のある石器などが見当たらない点も注目される。可搬性に富む遺物が多く、遺物組成に偏りが見られる。遺物量や組成の偏りから考えると、大量の散礫や集石、炉穴群は、短期間の居留（あるいは滞在）の積み重ねで生じたものと想定される。課題としては、周辺遺跡の遺構・遺物のあり方との比較を通して、遺跡間の関係把握を行なうことが指摘される。

(1) 遺跡の立地

小並第1遺跡は、高鍋町の西部に位置し、東方に牛牧原台地(標高約80m~90m)、西方に茶臼原台地(標高120m~130m)を望む丘陵地(標高約80m)上に立地する。

遺跡の東側には、宮田川支流の小並川が流れており、西側は、やや緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

本遺跡は、丘陵地部分を削平した茶畑の中にあるため、遺跡の中央部にアカホヤ層はほとんど存在せず、緑辺部にのみ二次堆積のアカホヤ層が存する。調査区北東部分は、杉林が残っていたが、表土下には全面、上述のアカホヤ層が存在する。

アカホヤ層の下位には黒褐色土層(Ⅲ層)があり、一部トレンチャーにより削平を受けているが、集石遺構や土器片・石鏃等の遺物が出土している。アカホヤ層より下位の層でも、丘陵地中央部、緑辺部で層序に違いが見られる。具体的には、中央部には、イワオコシスコリア層は見られるが、緑辺部には見られない。逆に、緑辺部には阿蘇4は見られるが、中央部には見られない。旧地形を反映してか、火山灰層の堆積の度合いも、中央部と緑辺部ではかなり異なる。

調査に際しては、便宜上調査区を南北2つに分け、現在北東部のA区を調査中である。

①縄文時代早期の遺構と遺物

現在、遺構は集石遺構が、北東から南西に延びる丘陵地の尾根に沿う部分とその尾根に沿って放射状に並ぶように、合計14基検出された。石材は、全体的に尾輪酸性岩が多い。集石の周囲には、散礫(焼け石を含む)が出土しているところもあり、今後集石との関わり等を検証していきたい。土坑は、現在4基確認されているが、1基(SC3)は、Ⅳ層面(旧石器時代?縄文時代草創期相当)で確認された。この1基については、埋土より40cm×25cmの石や礫が出土している。他の3基(SC1・2・4)は、Ⅲ層面(縄文時代早期)で検出され、埋土より、縄文土器(無文)、赤化礫等が出土している。散礫については、礫総数100点前後のものから、500点を超えるものまである。大きさも親指大から子供の拳大まで、様々な大きさの礫で構成され、中には、焼けて割れたものなども多数存在する。遺物については、全体的に石鏃が多く出土している。石材は、黒曜石(短島産)、チャート、頁岩が主で、形状は凹基無茎鏃が多い。その他、剥片、細石刃核、石斧などが出土しており、また大型の石器として、台石が数点出土している。

土器については、口縁部がやや外反し、貝殻刺突文を施す平格式が出土しているが、大部分は無文の土器片である。

(3) 小 結

本遺跡は、現在早期面を調査中であるが、丘陵地の南側で集石遺構、散礫が検出され、剥片、台石、敲石、細石刃核などが出土するなど遺跡の全体像が明らかになりつつある。また、細石刃核などは、隣接する唐木戸第3遺跡と石材や製作方法に共通する部分があるが、大型の土坑など、他の遺跡にはみられない遺構も検出されており、今後、性格について検討していきたい。



写真15 小並第1遺跡全景（北東より）

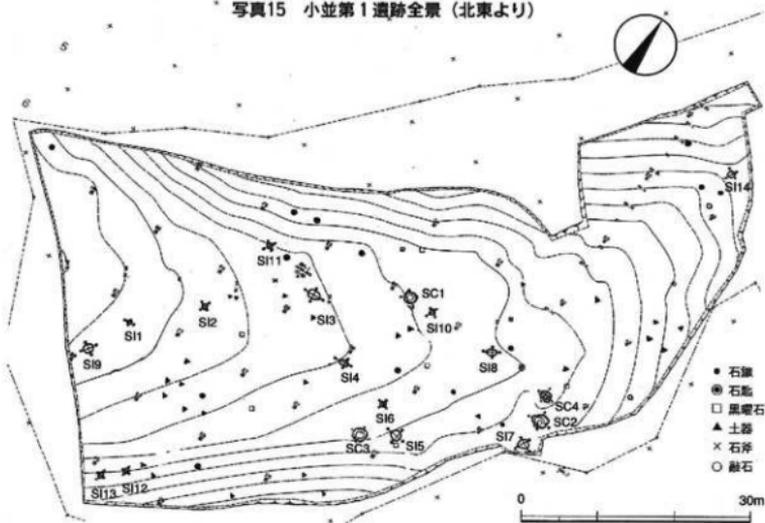


図20 小並第1遺跡検出遺構（1/600）

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、高鍋町の南西部の三財原段丘面中西端に位置する。標高は約92m。西方約70mには上位の茶臼原段丘面の段丘崖が迫っており、今回の調査区の北側は宮田川支流の小並川の谷床沿いの崖に接している。

(2) 調査の概要

Ⅲ層は鬼界アカホヤ層、Ⅳ層はアカホヤ層直下の黒褐色ロームである。Ⅴ層は小林軽石を含む褐色ロームで、バミスの量によりa～cに細分可能である。Ⅶ層は始良Tn火灰層(AT)で、aは土壌化が進み斑状のシミがあることが多く、下部が周囲より固くなっていることがある。二次堆積の可能性もある。bはaに比べ土壌化の度合いが低くさらさらしている。Ⅸ～ⅩⅠ層はいわゆる暗色帯で、色調やバミスの状況から分層した。ⅩⅢ層はアワオコシ、ⅩⅤ層はイワオコシに相当する。

上記のうち、小林軽石の上位とATの下部より遺物が出土している。

①後期旧石器時代の遺構と遺物

Ⅴb層で検出されたピットが多数あるが、埋土が上位のⅤ層と同じでⅥ層より上位での立ち上がりが見えない。これらについては、遺物を伴っていないこと、並ぶものがないことなどから、時期や性格について今後検討を加えていきたい。遺物については小林軽石～ATまでは数は多くなく、2カ所にブロックが認められるほかは密度が低い。AT下部(直下)には400点を超す遺物集中区があり小型のナイフ形石器、石核、剥片、チップなどが見られる点が特徴的である。

②縄文時代早期以前の遺構と遺物

住居と思われる円形に並ぶピット群を1基と、性格不明の二段掘りのある土坑群をⅤb層で検出した。円形配列ピット群は直径3mの円形に並び、Ⅴb層の上位7cmほど立ち上がりが確認された。また2mほど離れた西側にはⅤ層下部～中部を中心に土器片(無文)が40点確認され、遺構との関連が考えられる。また、黒曜石の剥片等が周囲のⅤ層からⅥ層にかけて出土しているが、関連は今のところ不明である。二段掘りの土坑群については、下部のAT層のブロックが1段目の掘り込みに入り込んでおり、人為的なものであると思われるが、現時点では性格不明である。周囲にⅤ層からⅥ層にかけてチャートの剥片が多く検出された。

(3) 小 結

今回調査を行ったA区で特筆すべき点は、AT直下でまとまった石器群が確認されたことである。製品は小型のナイフ形石器(二衝線加工の切り出し型)が6点であるが、縦長剥片、チップを多数伴い、石核や打面再生剥片なども見られることから、石器製作の場であったことがわかる。

AT上位についてはブロックの2カ所以外は遺物は散在しており、剥片尖頭器やスクレイパー、剥片などの遺物が単独で検出されることが多く、狩猟採集の場としての性格が強いものと思われる。

縄文時代については遺物の数が少ないため、実施予定の自然科学分析の結果や、他の遺跡の状況も踏まえ遺構と遺物の関連を明らかにしていきたい。

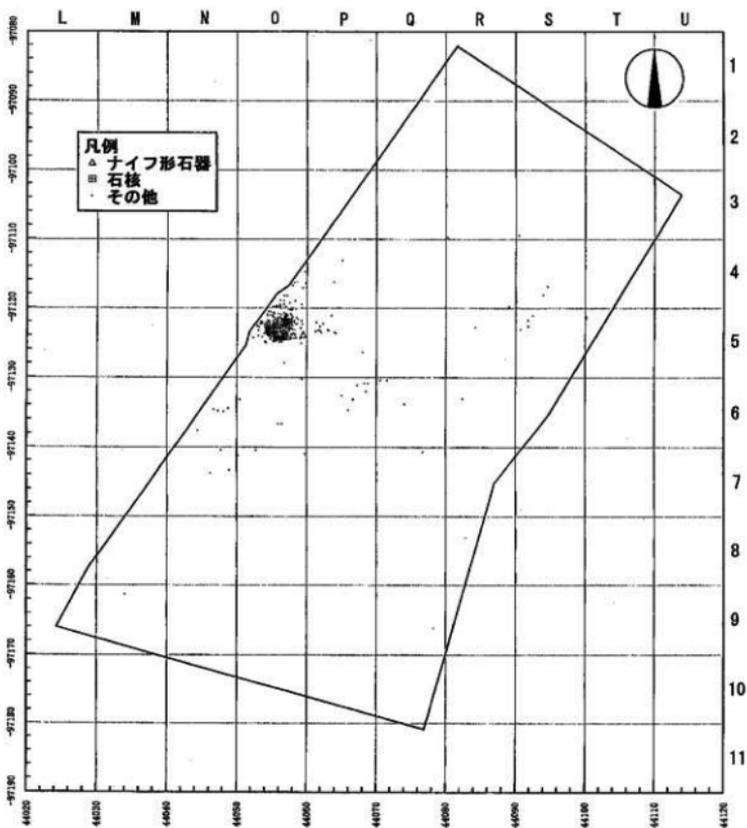


図21 牧内第1遺跡A区遺物分布図 (Ⅹ層) (1/700)

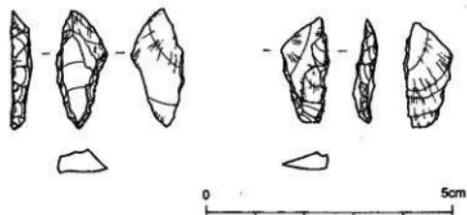


図22 Ⅹ層出土遺物 (ナイフ形石器) (1/1)

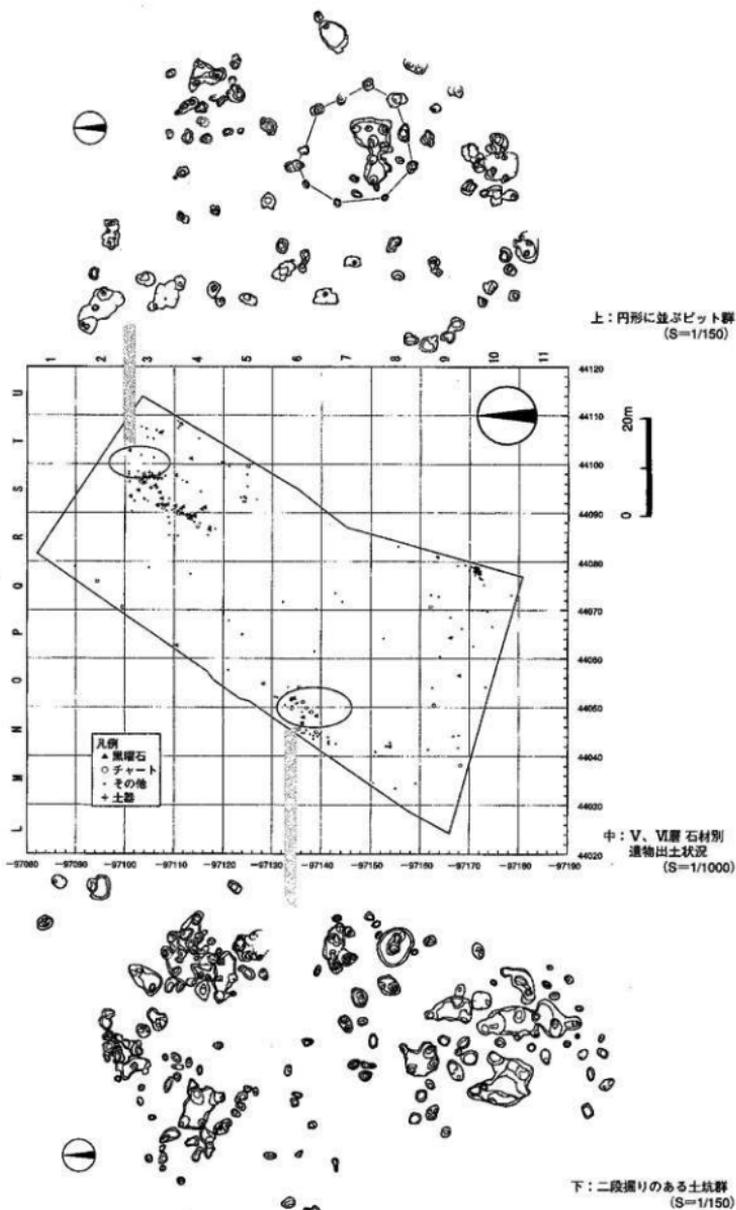


図23 V・VI層の遺物出土状況及び検出遺構



写真16 三財原段丘面の遺構群(1)



写真17 円形に並ぶピット群

61 まきうち 牧内第2遺跡 (高鍋町大字上江字牧内)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、牧内第1遺跡の南南西に隣接する。間には小さな谷が入るものの、実態としては一連の遺跡とすることができよう。標高は約95m。南には湯風呂川が流れる。

(2) 調査結果の概要

本遺跡内を東西に町道が走っている。便宜的に道路より北側をA区、南側をB区と分け、調査を行った。以前この場所は、松林、畑地であった。そのため樹根が多く、鬼界アカホヤ層(Ⅶ層)がB区中央部に黒褐色ローム(Ⅷ層)がB区北部中央に点在しているものの、大部分は耕作により削平されている。暗褐色ローム(Ⅸ層)以下は残存している。ここでは、各区ごとの調査概要を述べる。

A区では、表土を除去した後、Ⅸ層以下の掘り下げを人力により行った。Ⅸ層よりピットが1基、褐色ローム(ⅩⅣ層)より礫群が3基検出された。AT(ⅩⅤ層)下層については確認トレンチを設定し、遺物・遺構が検出されなかったため、イワオコシ(ⅩⅩⅣ層)までの層序を確認し、調査を終了した。

B区では、表土を除去した後、Ⅶ層上面で溝状遺構が確認された。埋土中の遺物から現代の遺構と確認された。Ⅸ層では、ピット4基、集石遺構1基が確認された。遺構は縄文早期のものである。ピットからの遺物は確認されていない。集石遺構は掘り込みは持たず、30個余りの礫が密に集まったものである。礫は、尾鈴酸性岩と泥岩であり、密集して検出された。礫の多くに赤変が認められ、礫間からは炭化物が検出された。遺物についてⅨ層において隆帯文土器と貝殻文系土器との折衷的な土器が200点出土した。同レベルで薩摩火山灰が検出されており、縄文草創期から早期にかけてのものと同位置づけられる。またⅨ層から小林軽石層(ⅩⅡ層)上面にかけて石鏃、細石刃、ナイフ形石器、黒曜石の剥片が多く検出されている。

①後期旧石器時代の遺構と遺物

礫群3基が検出され、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃、石核、剥片などが出土している。

②縄文時代草創期～早期の遺構と遺物

ピットが5基検出されたほか、集石遺構が1基確認された。また前述の通り隆帯文と貝殻文系との折衷的な土器や石鏃が出土している。

(3) 小 結

本遺跡では後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての集石遺構、礫群が検出され、また石器などの製品が出土している。今後、遺跡の性格について、慎重に検討していきたい。

また、図化しなかったが縄文時代草創期～早期の土器は、貝殻文系の出現の状況を解明する重要な資料となろう。

第3節 新富町内の遺跡

6.4 ひがしうむら 東睦原第1遺跡 (新富町大字新田字下迫口)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、東方に湯風呂川、西方に三財原川が流れる、三財原段丘面上の丘陵の南東斜面（標高約87m）に位置する。調査地周辺は、南東に向かって緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

本遺跡は、台地から南東方向にのびる丘陵部を削平して造成された耕作地である。そのため、調査区全域にわたって、鬼界アカホヤ層は存在せず、北西側はA T層下位の暗褐色ローム（V層）まで攪乱を受けていた。

鍵層としては、北東側と南東側の一部にA T層（IV層）が、全域にわたってアワオコシスコリア（Ⅲ層）、イワオコシスコリア（X層）などが確認されている。

遺物包含層は、A Tの二次堆積の可能性のある層（Ⅲ層）、A T下位の暗褐色ローム層（V層）、褐色ローム層（VI層）ととらえている。

今回は調査区（約3,800㎡）を、北東側のA区と南西側のB区に分けて調査を進めており、現在はA区のV層及びVI層を調査中である。

①後期旧石器時代の遺構と遺物

A区では、北東部のⅢ層から剥片が数点出土している。V層（A T下位の暗褐色ローム層）からは、礫らではあるがほぼ全域にわたって、主に頁岩を石材とする剥片が出土している。その内の約半数は、部分的に赤錆状に酸化している。



写真18 東睦原第1遺跡全景



写真19 A区散礫

A区南東部では、V層下部からVI層にかけて、東西約10m、南北約15mの範囲で散礫が検出された。尾鈴酸性岩や砂岩、頁岩、ホルンフェルスを主な石材とし、その一部は赤化しているものもあった。また、ほぼ同じ範囲で約0.5～2mmの炭化物、頁岩を主とする剥片、敲石や石核などが出土した。

B区は確認調査の段階であるが、南西部のⅢ層から流紋岩や頁岩を石材とする剥片、石核、礫などが出土した。また、焼石を含む集石が1基検出されている。

同じくV層からも、頁岩を主とする剥片が数点出土した。

(4) 小 結

本遺跡は、上記のように、ATの二次堆積の可能性のある層（Ⅲ層）、AT下位の暗褐色ローム層（V層）及び褐色ローム層（VI層）が遺物包含層であるが、現在のところ石器の製品は確認されていない。

しかしながら、後期旧石器時代の散礫とそれに伴って、炭化物や剥片等が確認されたことは重要であり、人間の何らかの営みが行われていたと考えられる。この営みの場の性格を解明していくことが課題の一つである。さらに、下層の包含層の有無や、より古い石器群の探求も課題としてあげられる。

今後実施予定の自然科学分析や、隣接する他の遺跡の調査結果を参考にしながら調査を進め、本遺跡の性格等を解明していきたい。

65 東畦原第2遺跡 (新富町大字新田字中原)

(1) 遺跡の立地

東畦原第2遺跡は、新富町西北部を流れる三財原川に向かって緩やかに傾斜する台地上に位置する。標高は約89mで、南西方向に緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

調査は、全調査区をA・B二つに分け、北東部に位置するA区から行った。

A区は、耕作によるトレンチャー痕が見られるものの、鬼界アカホヤ層(Ⅱ層)より残存している。Ⅲ層(黒褐色層:縄文早期)・Ⅳ層(暗褐色層:縄文草創期)より精査を始め、現在Ⅴ層(小林軽石層:後期旧石器)の精査を行っている。Ⅴ層は、平均で70cm程堆積しており、小林軽石を密に含んでいる。今後は、ATを除去し、Ⅵ層(黒褐色層)の確認を行っていく予定である。

B区は、現在表土を除去し、アカホヤ上面での精査を実施し、A区と同様に調査を進めていく予定である。標高の低い南西部は、1.5m程度客土が堆積し、鬼界アカホヤ層も二次堆積の可能性が高い。Ⅴ層は、A区同様小林軽石を密に含んでいる。

調査区全体を通して、アワオコシスコリア(XⅠ層)、イワオコシスコリア(XⅢ層)、粘土質の明黄褐色ローム層(XⅣ層)まで残存している。



写真20 三財原段丘面上の遺跡群(2)

(3) 後期旧石器時代

V a層（小林軽石上部）及びV b層（小林軽石中）、V c層（小林軽石下部）より、剥片79点、チップ7点、石核3点、ナイフ形石器2点・敲石ではないかと見られる礫が1点出土した。これらは、ほとんどが南西部に集中し、石器ブロックを形成すると思われる。石核と剥片の接合関係も何点かが確認できており、今後の整理作業の中でさらに広がる可能性が高い。また、A区北東部で出土したナイフ形石器は、翼状剥片の背面加工が施された形跡があることから、国府型ナイフではないかと思われる。

(4) 縄文時代早期

遺構は検出されなかったが、Ⅲ層中及びⅣ層上面で、平格式土器・無文土器が79点出土している。出土地点は、A区南西部に集中していた。土器片は、いずれも5cm程度の小片で、無文土器も平格式土器と同時期のものとして判断している。さらに、石鏃が1点、黒曜石剥片3点が出土している。

そのほか、Ⅱ層上面で時代不明遺構が2基が検出された。うち1基は、長径5.0m・短径3.0m、深さ0.7m、他の1基は、長径2.0m・短径0.8m・深さ0.4m程度の規模である。2基とも、検出面上部が削平を受けており、遺物も出土しなかったため時期は不明である。したがって、前者の1基について、埋土を自然科学分析にかけ、その時期や性格を推定し明らかにしていく予定である。

(5) 小 結

現在までに調査を進めてきたA区南西部は、小林軽石を含む層よりまとまった石器ブロックが検出された。製品はナイフ形石器1点であるが、剥片・チップを多数伴い、また、敲石ではないかと思われるものも数点みられることから、石器製作の場と推察される。今後、B区の調査をまわって、さらに検討を加えていきたい。

また、Ⅲ・Ⅳ層からは縄文土器小片がまとめて出土したが、周辺からは住居跡と思しき遺構が検出されなかったため、この時代の本遺跡がどのような場所であったかについては現在のところ不明である。B区の調査結果をふまえて総合的に検証していきたい。

(1) 遺跡の立地

新宮町の北西部を流れる三財原川に向かって緩やかに傾斜する三財原台地上に位置する。標高約85m。本遺跡は北と南の双方にゆるやかに傾斜するが、谷が走る南西に向かっては急激に傾斜している。また、西側、北西側は耕作に伴う削平が著しい。

(2) 調査の概要

本遺跡は、調査対象区北部に当たるA区(標高86m)、農業用道路を挟んで標高の高い東側をC区(86m)、標高の低い西側(83m)のC区、さらにA区の北東に隣接する標高の一段高いD区(88m)に分けている。

基本層序は鬼界アカホヤ層(Ⅲ層)、黒褐色ローム(Ⅳ層)、暗褐色ローム(Ⅴ層)、層褐色ローム(Ⅵ層)、AT(Ⅶ層)、暗褐色ローム(Ⅷ層)、赤褐色ローム(Ⅸ層)、アワオコシ(X層)、明褐色ローム(XⅠ層)、イワオコシ(XⅡ層)となる。鍵層となるⅥ層(小林軽石)、Ⅶ層AT、X層アワオコシ、XⅠ層明褐色ローム、XⅡ層イワオコシについては、全ての調査区で確認することができた。

昨年度、A区では、Ⅳ層からⅨ層までの調査を行っている。Ⅶ層では、石器を含む礫群3基、Ⅵ層上面で土坑1基を確認した。B区ではⅤ層からⅧ層までの調査を行っている。遺構は、Ⅴ層で土坑1基、Ⅵ層でピット2基を検出し、遺物数点を確認した。C区ではⅥ層からⅨ層までの調査を行っている。遺構については、確認されなかったが、石鏃、剥片等が出土している。

本年度はD区の調査を実施した。D区は丘陵地の最も高いところで、ここから北西に位置するA区に向かってゆるやかに傾斜している。ここでは、開墾による削平を受けることもなく、Ⅱ層からXⅡ層まで良好な状態で堆積していた。

Ⅲ層上面では溝状遺構2条、土坑7基、多数のピットを検出した。溝状遺構はD区の北東端と南東端で検出したが、掘り込みが浅く遺構の端が消失し、遺物も伴っていなかった。土坑7基のうち、2基は調査区の中央部で検出された。2基とも楕円形のプラン(長径約2m、短径1m)を形成しⅥ層まで掘り込まれていた。遺物は伴っていなかった。その他の土坑は円形のプランで大きさは径0.5~1m、遺物は確認されなかった。ピットは径20cm前後で、東側に弧を描くように約1m間隔で検出された。Ⅶ層では、上位で礫群(石器を含む)3基、下位で礫群3基が確認された。同じく、Ⅸ層上位でも、礫群1基(石器を含む)が確認された。

①後期旧石器時代の遺構と遺物

遺構は確認されなかったが、Ⅵ層で剥片、剥片尖頭器等が出土した。石材は頁岩が主であった。

Ⅶ層では、調査区の北側中央と西側中央の2箇所礫群が7基検出された。礫群のうち2基には、ナイフ形石器、剥片等を含んでいた。どの礫群でも、赤色化した尾鈴酸性岩、砂岩等が見られた。

遺物は、石核、蔽石、スクレイパーが出土している。石材は頁岩が主であった。

Ⅸ層赤褐色ロームでは、調査区の東側中央で礫群1基が検出された。礫の密度は、最も高く剥片等を含んでいた。Ⅶ層、Ⅸ層の礫群は、部分的に炭化物を含んでいた。

②縄文時代早期の遺構と遺物

遺構は確認されなかったが、IV層より石鏃、剥片が出土した。石材は頁岩が主であるが、チャートも僅かに含まれていた。

(3) 小 結

本遺跡の遺物包含層は、IV層黒褐色ローム、VI層褐色ローム、VII層暗褐色ローム、IX層赤褐色ロームの4層である。

後期旧石器時代については、遺構は確認できず、各遺物包含層において頁岩を中心とする剥片等が出土している。また、数箇所焼土、焼礫、炭化物等が出土している。さらに、礫群をVII層、IX層で確認している。この結果は、昨年度調査したA区と同じ傾向にある。昨年度調査したA区では、石核、敲石、剥片、チップ等の石器製作工程が考えられる礫の広がり確認された。

縄文時代早期相当の層からは土器は出土せず、遺構も確認されなかった。遺物も出土量は少ない。昨年度調査したA、B、C区を含め、遺物の分布密度は低いものと思われる。なお遺物のほとんどは石鏃であった。

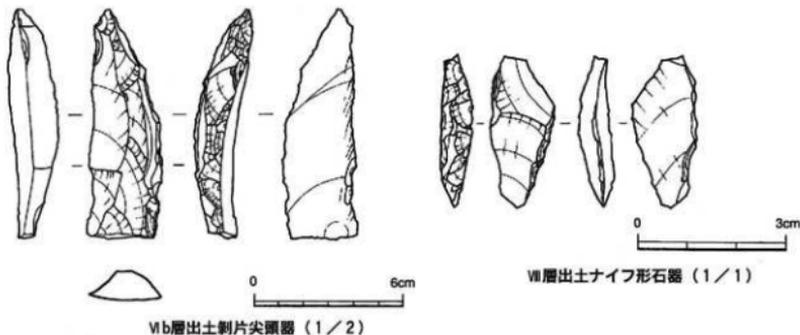


図26 出土石器



写真21 左：D区 礫群出土状況



右：D区 調査風景 (南から)

(1) 遺跡の立地

西畦原第1遺跡は、一ツ瀬川の左岸に広がる標高80~90m程の三財原段丘面と、そこに刻まれた閉折谷が入り組む緩斜面(標高約78m)上に立地する。本遺跡の北西側は湧水地があり、調査区は以前は棚田であったと聞く。その後耕地整理により、調査区東側と南側に厚く客土を盛り、田畑として利用されてきた。本遺跡の近くには、新田原古墳群や弥生時代中期後葉から後期前葉の遺跡である新田原遺跡や、畦原型細石核の標式遺跡である西畦原遺跡が立地する。

(2) 調査の概要

昨年度の調査に引き続き、本年度は、IV a層(黒褐色土)とIV b層(暗褐色土層)において縄文時代早期の調査と、VII層(小林軽石層)において後期旧石器時代の調査を行った。なお、調査区の西側部分では、縄文時代早期と草創期の区分の鍵層となるV層(桜島薩摩層)が層を成していた。

①後期旧石器時代

遺構は、調査区北側において礫群1基、土坑1基、ピット6基、調査区南東側において、礫群1基、ピット1基が検出された。遺物を伴わず、明確な性格は不明であるが、SC201は、長径153cm + α (上端は削平を受ける)、短径93cm、深さ61cmを計る比較的大きなものであった。

遺物は、細石刃・ナイフ形石器・敲石・剥片などの石器が出土している。

②縄文時代早期

調査区南側において、集石遺構3基、土坑7基、¹ピット3基が検出された。これらも遺物を伴わず、明確な性格は不明である。しかし、SH109は斜め方向に掘り込まれ、底部に粘質土が確認されたため、柱穴ではないかと考えられる。また、SC103は5mm程度の球形の炭化物を多く含み、放射性炭素年代測定においてBC5, 470年という値を得た。

遺物は、燃糸文や貝殻条痕文系の土器片や30点余りの打製石鏃や敲石・剥片などの石器が出土した。

(3) 小 結

本遺跡では、上記のように、縄文時代早期以前の遺物・遺構が検出された。

縄文時代早期以前は調査区中央部に浅い谷が走り、大きな湿地も広がっていたようである。この谷の西側部分で、IV b層直下において桜島薩摩層が検出されたが、今後調査される遺跡において、縄文時代草創期~早期の文化編年に有効ではないかと考えられる。

出土遺物については、縄文時代早期の打製石鏃が若干量出土している点が注目される。今後、出土遺物の分析を通して遺跡の性格について検討したい。また南西側の未調査部分における確認調査で、今回の調査区との関連の強い遺構や遺物が検出されており、この部分の調査成果にも期待したい。

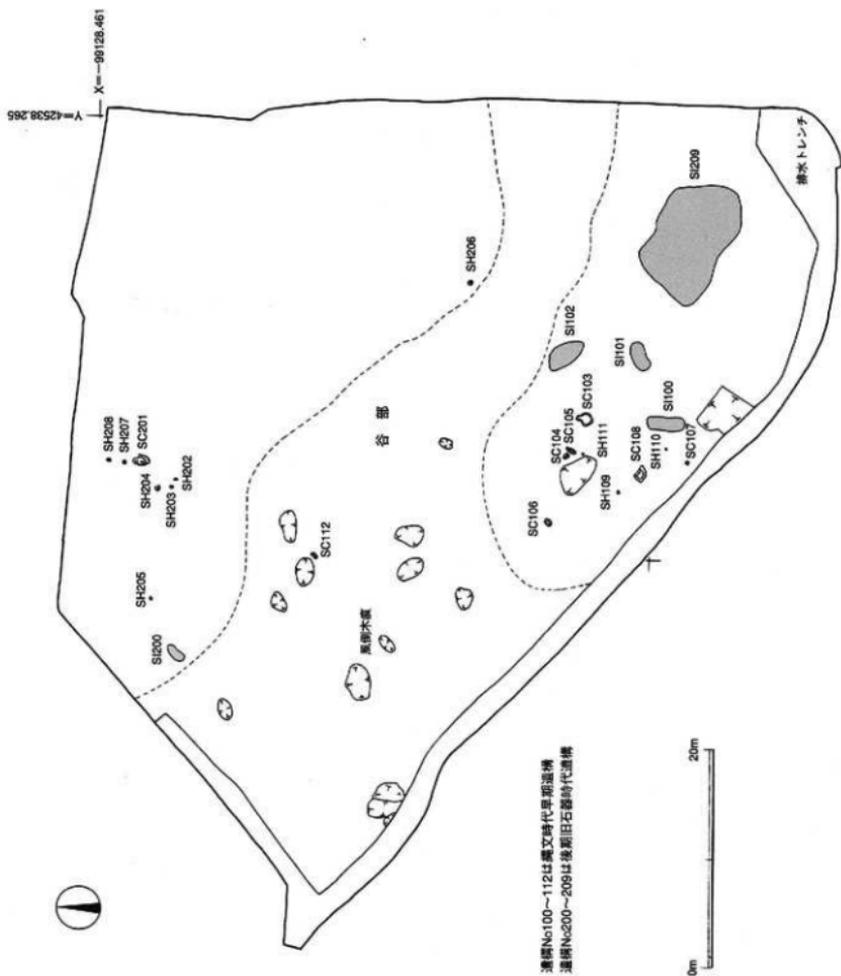


図25 西畦原第1遺跡縄文時代早期及び後期旧石器時代遺構分布図 (1/400)



写真22 西睦原第1遺跡全景（南東側から）



写真23 谷地形土層断面

(1) 遺跡の立地

本遺跡は一ツ瀬川左岸に広がる三財原段丘面上に立地している。微地形的には鬼付女川およびその支流の三財原川に挟まれた丘陵基部に当たり、調査区は丘陵西側に深く入り込んだ開析谷に向かって緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

遺跡の現況から本年度調査区をA・B区に分け、さらにA区を南北に二分した。鍵層としては鬼塚アカホヤ層(Ⅲ層)、小林軽石層(Ⅵ層)・AT(Ⅸ層)、アワオコシ(XⅡ層)、イワオコシ(XⅣ層)が確認されており、Ⅳ～Ⅷ・X・XⅠ層が遺物包含層である。

①後期旧石器時代

Ⅵ層を中心として細石刃製作に伴うブロック、Ⅵ～Ⅷ層にかけてナイフ形石器・スクレイパー・角錐状石器などを含むブロック、さらにX層でナイフ形石器を含むブロックが検出されている。遺構はⅥ・X層でそれぞれ散礫が見られた。

②縄文時代

Ⅳ～Ⅴ層にかけて多数の石鏃が出土している。調査区全面にわたり散漫な分布状況を示しており、製作に伴う調整剥片は現在のところ認められない。遺構は集石遺構1基・土坑3基が検出された。集石遺構は約128点という比較的少数の焼礫片で形成されており、短期間使用の後に廃絶された様相を呈している。

③その他の時代

Ⅲ層上面で土坑・ピット群を検出しているが、そのほとんどは遺物を伴わず時期決定が困難である。SC1は検出面(Ⅳ層)で約5×3mを測る大型の土坑であるが、土層の堆積状況などからⅢ層堆積以後の遺構である可能性が高い。混入と考えられる石鏃・陶磁器片の他に遺物は認められなかった。自然埋没の過程で変形しているが、平面隅丸長方形・断面逆台形という端正な形状であったと推定される。同様の土坑は北牛牧第5遺跡(平成12年度調査)・東畦原第2遺跡でも検出されており、構築時期・用途について検討を進める必要がある。

(3) 小 結

旧石器時代の成果としては、X層でナイフ形石器が出土したことがあげられる。横長剥片素材・二側縁加工のナイフ形石器であり、AT下位の資料として注目される。この石器は縦長剥片2点・礫3点とブロックを形成していたが、石核・チップ等は一切見いだされず、むしろ移動の過程において何らかの事情により放置されたものと考えられる。

Ⅳ・Ⅴ層の石鏃は、土器の共存こそ認められないが、出土層位より縄文時代早期の所産である可能性が高い。また調査区全面に散らばっているという印象を抱かせる出土状況であり、衝撃を受け破砕したと見られる破片もある。これらの石鏃は射放たれたままの状態であると考えられるならば、当地が狩猟の場であったことを示す証拠となろう。土器片の出土を見ない点もそれを裏付けているのではなかろうか。

(1) 遺跡の立地

尾小原遺跡は、標高約80mの新田原台地の南西部に緩やかに張り出す、東西幅約200m、南北長約600mの尾根上に位置する。現在は尾根の付け根部からすると10mほど削平され、標高約70mの畑地になっている。周囲は東から南西部にかけて谷が形成され、西部は小さな谷となって北西部にいたるので、周囲4分の3を谷が取り囲む形となっている。

(2) 調査の概要

確認調査時に、縄文早期に形成されたと思われる層(黒褐色土)から剥片が、小林軽石を含む層から散礫や剥片等が出土した。これを受けて本調査では、調査面積を5500㎡とし、A・B・C区の3区に分け、調査開始から2か月を過ぎた現時点ではC区の2000㎡を調査中である。

現調査区の基本土層は、当台地の基本層序とほぼ同じであるが、暗褐色層は黒に近い極暗褐色層と褐色の斑紋を含む暗褐色層に分層できる。またAT層は二次堆積と思われる暗褐色に見える層と二重の斑紋が混じるATローム層、純粋なAT堆積層と3つに分層可能である。

これまで確認できた遺構・遺物は、鬼界アカホヤ上位の黒色土から、土器片(叩き痕が認められる)、石包丁、打製石斧、鬼界アカホヤ層直下の黒褐色土層で集石1基、土器片(貝殻炭文系)や石鏃、剥片、その下位の暗褐色土層から小規模な集石1基(耕地整理時に削平された部分有り)、その周囲より黒曜石を中心にチップや剥片、また他の区域では黒曜石製の石鏃や石英製と思われる石鏃、剥片等が出土している。また、更にその下層の暗褐色層では、遺物は見られないものの、礫が1個から3個程度で集まっている部分が数箇所みられる。

以上のように本遺跡の遺物包含層は、鬼界アカホヤ直下の黒褐色層、その下層の極暗褐色層、斑紋が混じる暗褐色層の上位、及び今後調査を行う小林軽石を含む層と捉えられる。

現在調査中のC区は北端を中心とする谷地形をなし、鬼界アカホヤ層が他の部分と比べて厚く堆積している。黒褐色土上で小地形をみても、この小さな谷を囲んで、東は尾根から下ってくる西向き斜面と、尾根の先端部の小高い地形から下る北東向き斜面があったと思われる。また、C区とB区の境部分は南東側が急な崖になっていることから、尾根の間に開け、小さな谷を北西に臨む小規模な平坦地だったと推測される。B区は、東の尾根から西に下る斜面を形成し、緩やかな面を部分的に含みながら、谷に下る地形をなしていたと推測される。

(3) 小 結

調査開始から日が浅いため、遺跡全体としての概要を詳細に述べるには不十分である。現段階では、石鏃の出土が多いこと、遺構がみられないという点などが指摘できる程度である。

今後調査範囲を広げ、遺跡の全容を明らかにしていく予定である。



写真24 尾小原遺跡作業風景

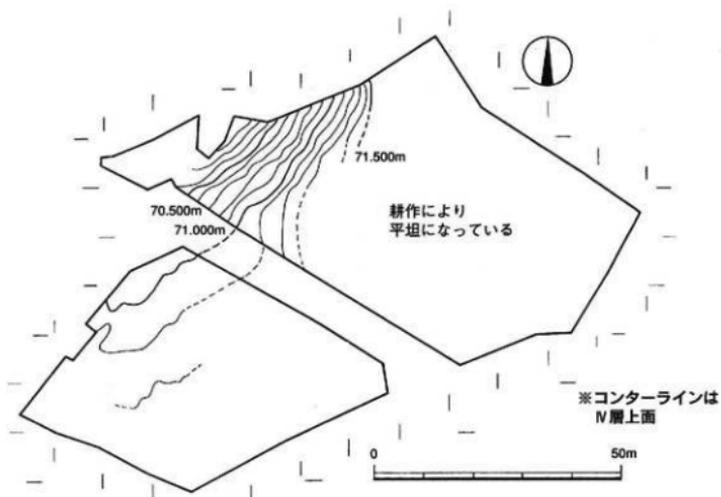


図26 調査区 (B・C区) 平面図 (1/1000)

平成13年度

東九州自動車道(都農～西都間)関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

平成14年(2002)3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社 都城印刷